お隣の天使様にいつの間にか駄目人間にされていた件

先行試読版

GA文庫

第1話　天使様との出会い

「……なにやってるんだ」

藤宮周が彼女――椎名真昼と初めて話したのは、雨が降りしきる中、公園でブランコに座っていた彼女を見かけた時だった。

今年高校一年生となり一人暮らしを始めた周が住むマンションの右隣には、天使が住んでいる。

天使というのはもちろん比喩であるが、その比喩が冗談ではないほどに椎名真昼は美しく可憐な少女だ。

手入れの行き届いた亜麻色のストレートヘアーはいつもさらさらとして光沢が見えるし、透けるような乳白色の肌は肌荒れを知らない滑らかさを保っている。整った鼻梁に長い睫毛に覆われた大きな瞳、艶を帯びた形のいい桜色の唇といい、作り物めいた繊細な美しさを誇っていた。

彼女と同じ高校、それも同学年に居る周は真昼の評判をよく聞くが、文武両道の美少女というものが大半だ。

実際彼女は定期考査でも常に一位を取っているし、体育の授業でもエース並みの活躍をしているそうだ。周はクラスが違うので詳しくは知らないが、噂通りなら完璧超人なんじゃないかと思うほどである。

欠点らしい欠点は見えず、容姿端麗で成績優秀、それでいて驕らず謙虚で大人しい性格だとくれば、それはモテるのにも頷ける。

そんな美少女が隣に住んでいるのだから、この環境は一部の男子からは喉から手が出るほどに羨ましい状況なのだろう。

かといって、周には彼女とどうこうなるつもりもなれるつもりもなかった。

もちろん、周にも椎名真昼という少女は魅力的に映る。

けれど、立場としてはたかが隣人。そして彼女と話す機会もなければ、関わるつもりもない。

関われば男子からのやっかみも飛ぶだろうし、そもそも隣に住んでいるだけで仲良くなれるのであれば、彼女に恋をした男子達も苦労しないだろう。

ついでに言うならば、異性として魅力的な事と恋愛感情を持つ事は必ずしもイコールで結ばれる訳ではなく、周にとって真昼は眺めるのが一番いい鑑賞用の美少女といった認識だ。

そんな訳で、甘酸っぱい関係とやらを期待する気も更々なく関わる事もまずなく、ただ隣に住んでいるというだけで接触すらしていなかった。

なので、正直雨の中傘をささずに一人佇む姿を見かけた時は何をやってるんだと不審者を

見るような眼差しになってしまった。
皆が寄り道もせず自宅へと急ぐ程の雨だったというのに、彼女は学校とマンションの間にある公園で一人、ブランコに腰かけていた。
（雨の中なにやってるんだ）
濃い灰色の雲に覆われ光が差さない空のせいで薄暗く、朝から降り注ぐ雨で視界も悪かったが、あの目立つ亜麻色の髪と制服ですぐに真昼だと分かる。
何故そこに、傘もささず濡れるがままになって佇んでいるのかが分からなかった。
誰かを待っているといった訳でもなさそうで、濡れる事に抵抗もなくただぼんやりとどこかを見ている。
僅かに上向いた顔は元々の色素の薄さもあるが血色が悪く、青白くすら見える。
下手すればあっという間に風邪を引きかねない状態で、それでも真昼は静かにそこに居た。
帰ろうとすらしていないのだから、本人が好んでそうしているのだろう。他人が口出しするものではないのかもしれない。
そう思って、公園の横をすり抜けようとして――最後に見た真昼の顔がどこか泣きそうに歪んだように見えて、周はぐしゃりと頭をかいた。
別に、彼女と関わりたいとか、そういう動機は生憎と持ち合わせていない。
ただ、ああいった顔をした人間を放っておくのは、なんとなく良心が痛んだ。それだけだ。

「……なにやってるんだ」

他意はない、という意味を込めてなるべく素っ気なく声をかけると、水分でずっしりと重くなっていそうな長い髪を揺らして、こちらを向く。

相変わらず、綺麗な顔だった。

雨に濡れていてもその輝きはくすむ事もなく、むしろ雨すら彼女の顔を引き立たせるような小道具になっている。雨も滴るいい女、というやつなのだろう。

ぱっちりとした二重の瞳が、こちらを見る。

一応、真昼は周を隣人だと認識してはいるだろう。たまに朝すれ違ったりはするのだから。

ただ急に話しかけられた事に、そして今までまったく関わりのなかった人間からの接触に、暗褐色の瞳にうっすらと警戒が滲んだ。

「藤宮さん。私に何かご用で？」

ああ名字は覚えられていたんだな、と妙な感慨を抱いたが、同時にこれは恐らく警戒を緩める事はまずないな、とも察した。

流石に、見ず知らずとは言わないものの他人に声をかけられれば、ガードを固めるのも頷けた。

そもそも彼女は学年問わず校内の男子生徒から告白やアプローチを受けているらしく、あまり異性と関わりたくないのかもしれない。下心を持っている、とでも思われたのだろう。

「別に、用はない。ただこの雨の中一人でこんなところに居たら気になるだろう」
「そうですか。お気遣いはありがたいですが、私はここに居たいから居るので。私の事はお気になさらず」
警戒心剝き出しの尖ったような声ではなく、あくまで柔らかく、それでいて内側に入れる気は更々ない淡泊な声だった。
（まあ、そうなるよな）
訳ありなのは明白で、関与してくるなという拒絶の表れに、周も深追いする気はなかった。
元々、気まぐれに話しかけにいったようなものだ。事情を聞こうとしたのも流れというだけで、さほど気になるものでもない。
彼女がここに居たいというなら、別にそれでもいいのだろう。
むしろ真昼としては何で話しかけてきたんだ、といった感情が湧いてる筈だ。
儚げな美貌が胡乱げにこちらを窺っているので、周は「そうか」とだけ返す。
ここでまだ話しかけていけば確実に嫌がられるので、もう撤退するべきなのだろう。
幸いというか、別に真昼によく思われようが悪く思われようが関わりがないので、あっさりと放っておいて帰るという事を決断出来た。
ただまあ、ここで少女がずぶ濡れになって一人ぼっちで居る、というのも居心地が悪い。
「風邪引くし、さして帰れよ。返さなくていいから」

なので、最後にお節介を一つだけ落としていく。
風邪でも引かれると何となく寝覚めが悪い、そう思ったから今まで頭上を覆っていた傘を差し出す。
彼女に受け取らせた、正しく言えば押し付けた周は、彼女の唇が動く前に背を向けた。
足早に離れると、背後から真昼の声がする。
けれど雨音にほぼかき消されるくらいに小さな声で、周はそのままさっさと公園の横を抜けていく。
まあ風邪引かないといいな、程度に押し付けたせいなのか、最初に無視して通り過ぎようとした罪悪感が少しだけ軽くなった。
彼女が会話を拒んだのだから、周はもう関わるつもりはない。
どうせ縁もないし、これっきりだ。
改めて帰路に就いた周はそう思っていた。その時は。

第２話　風邪と天使様の看病

「周、鼻うるさい」
「お前こそうるさい」
翌日、風邪を引いたのは周の方だった。
級友、というよりは悪友である赤澤 樹に指摘され、周はフンと鼻を鳴らそうとして失敗した。
代わりに鼻呼吸をすればずず、と水音がしてある意味鼻が鳴っている。
体調は最悪で、鼻がつまっているせいなのか風邪そのもののせいなのか、頭の奥からずきずきと痛みを訴えられていた。
市販の薬は飲んできたものの、完全に症状が抑えられる訳もなくこの様である。
あー、と鼻づまりに顔を歪めつつティッシュと仲良くしている周に、樹は心配というよりは呆れたといった風な目線を向けた。
「昨日まで元気だったろお前」
「雨に濡れた」

「ドンマイ。つーか昨日傘持ってなかったっけ」
「……人に渡した」
流石に学校で真昼に渡した、なんて言える筈もなく、曖昧に濁す。
ちなみに真昼の方は学校でちらっと見た感じ顔色も悪くなく元気そうだったので、傘を渡した自分だけが風邪を引いて笑うしかない状況だった。
しっかり風呂で温まらなかったのが原因なので自業自得なのだが。
「あんな雨降ってたのに貸しちまうとか、お人好しすぎないか？」
「しゃーねえだろ、渡しちまったんだから」
「わざわざ風邪引くリスク背負ってまで誰に渡したんだよ」
「……通りすがりの迷子の子供？」
子供と言うには随分と立派な体つきをしているが。というかそもそも同い年なのだが。
（……ああそうか、迷子みたいな顔だったのか）
自分で言って、ようやくしっくりきた。
あの時の真昼の表情は、迷子の子供が親を求めている時のものにそっくりだったのだ。
「お優しいこった」
昨日の真昼の事を思い出している周の心情は知らず、樹はからかうように笑った。
「でもまあ、傘貸したにせよ何にせよ、お前その後適当に体拭いて終わっただろ。そっちが原

因な気がするが」
「……何で分かるんだよ」
「お前の不摂生具合はお前んち行ったらすぐ分かるわ」
だから風邪引くんだよバーカ、とさりげなくけなされて、周は口をつぐむしかない。
樹の言う通り、基本的に周はあまり自身の事に頓着しない。
もっと言えば整理整頓が苦手で部屋はぐちゃぐちゃだし、食べるものもコンビニ弁当か栄養補助食品、それか外食となっている。
よくそれで一人暮らしすると言えたな、と樹に呆れられるほどだ。
そんな生活を見ている樹からしてみれば、周が適当に過ごして風邪を引くのも頷けるだろう。
「今日はさっさと家に帰って早く休むんだな。土日あるし、さっさと治してこい」
「そうするわ……」
「せめて看病してくれる彼女でも居たらよかったのになあ」
「うるせえ。彼女持ちは黙ってろ」
ちょっと誇らしげに唇を緩めた樹に、周は無性に腹が立って自前のボックスティッシュで手の甲をはたいた。
時が経つにつれて、体調は悪化の一途を辿っていた。

頭痛と鼻水だけで済んでいた風邪の症状は、喉の痛みと倦怠感まで仲間にして体を支配している。放課後脇目も振らずに道を急いだものの、思ったよりも体は風邪に負けているらしく、遅々とした足取りとなっていた。

それでもようやくマンションのエントランスにたどり着き、重たい足を動かしてエレベーターに乗った所で、壁にもたれる。

はー、とこぼれる息は平常より荒く、熱い。

どうやら学校では耐えていたらしいが、もうすぐ家につくという事で油断したのか、体が一気に不調を訴えかけてきていた。

エレベーターの独特の浮遊感も、普段なら平気なのに今は地味な苦痛になっている。

それでも、もう家につく。

自分の住まう階にエレベーターが止まり、周は緩慢な動作でエレベーターから降り、自分の部屋がある廊下に足を向けて――一度固まった。

視線の先には、もうろくに話す事もないだろうと思っていた、亜麻色の髪をなびかせた少女が居た。

見たところ、可憐な容貌には生気があり、肌も血色がよさそうだ。

どう考えても彼女の方が風邪を引きそうだったのに、ぴんぴんしていた。普段から体に気を付けているか、如実に差を見せつけられている。

真昼の手には、先日押し付けた傘がきっちりと畳まれて握られている。
返さなくてもいいと言ったのに返しに来たのだろう。
「……返さなくても、よかったのに」
「借りたものは返すのが当たりま、……？」
途中で言葉を切った、というより切れたのは、周の顔を見てからだ。
「あの。熱、ありますよね……？」
「……あんたには関係ないだろ」
最悪のタイミングで出くわした、と周は眉を寄せる。
傘は極論、返却しようがしまいがどっちでもよかった。
しかし、今のタイミングで会うのはよくない。賢い彼女なら、すぐに周が風邪を引いた理由にたどり着くだろう。
「でも、それは私に傘を貸したせいで……」
「俺が勝手にやった事だから関係ないだろ」
「関係あります。私があそこに居たからあなたは風邪を引いてしまった訳で」
「いいんだよ別に。お前が気にする事じゃない」
周としては、こっちが自己満足でやった事なのに気にされるのは、嫌だった。
しかしながら、真昼にそのままはいそうですかと放ってくれそうな様子はない。端整な美貌

には焦りが浮かんでいる。

「……もういいから。じゃあな」

問答している方が周としては辛いので、無理矢理にでも真昼の追及と心配から逃れる事にした。

ふらりとよろめきながら雑に傘を受け取り、ポケットから鍵を取り出す……所までは、よかったのだ。

周が若干もたつきながら自宅を開けた瞬間、体から力が抜ける。

ようやく家に入れる、と安心してしまったのが悪かったのだろうか、ふらっと後ろの柵に向かって体がかしいだのだ。

やべ、とは思ったものの、柵は頑丈でぶつかった程度で壊れる心配はないし、高さもあるので落ちる事もない。多少打ち付けようが痛いで済むから、まあ仕方ない……と痛みを覚悟した。

ところが、ぎゅっと腕を引っ張られて無理に体勢が元に戻る。

「……さすがに放っておけません」

か細い声が、少しぼんやりした意識に届く。

「借りは、返します」

熱が上がってきたのかぼんやりとしだした頭で彼女の言う事を噛み砕こうとして、やめた。

理解する前に、真昼は力が抜けかけている周の体を支えて周の家の扉を開けたのだから。

「入りますけど、致し方なくなので許してくださいね」
静かな声音は有無を言わさないものだった。
風邪っぴきの周は抵抗する気力がなかったので、引っ張られるまま、初めて同年代の女性を伴って帰宅した。
看病してくれる彼女は持ち合わせていないが、どうやら看病してくれる天使は居たようだ。
入れなければよかったと後悔したのは、熱でゆだった頭で遅れて自宅の現状を思い出した、というよりは実態を見てからだった。
周が住むマンションは、１ＳＬＤＫ。
広々としたリビングに寝室、おまけの納戸まであり一人暮らしには随分と贅沢な住まいだが、親がそこそこに裕福でセキュリティと交通の便を考えてここに決められた。
一人暮らしをするならここ、と決めたのは親なので文句を言うつもりはないのだが、別にそんな金かけなくてもよかったのでは、と思ってはいる。一人で住むには持て余す広さだ。
さておき、周は一人暮らしであり、そして整理整頓が苦手な男だった。
当然、リビングはおろか寝室まで物が散乱していた。
「目も当てられませんね」
天使様改め救世主様は愛らしい見かけによらず大変素直な言葉を周に贈呈していた。

実際ひどいので、周も何も言えない。他人を家にあげると分かっていたら多少は物を退かしていたのだが、それも今更な話だった。

艶やかな唇からため息をこぼした真昼は、それでも帰る事はせず周を寝室に運ぶ。

途中二人して転びかけたので、そろそろ真面目に片付けなければまずいのでは、と散らかした本人が痛感していた。

「とりあえず、一旦出ますから私が帰ってくるまでに着替えておいてください。いいですね」

「……帰ってくるのかよ」

「放って寝込まれても寝覚めが悪いので」

以前ずぶ濡れの真昼に思ったような事を周にも思ったらしい真昼が素っ気なく返すので、周もそれ以上は文句も言えなかった。

真昼が部屋から出た後、大人しく言いつけ通りに部屋着に着替える。

「ほんとにぐちゃぐちゃというか、足の踏み場が……なんでこれで生活出来るのですか……」

着替えの最中困惑の声が小さく聞こえて、かなり申し訳なくなった。

着替えた後横になったらいつの間にか眠っていたらしく、重たい瞼を何とか持ち上げると亜麻色の髪がまず視界に入った。

その髪を辿るように視線を上げれば、どうやら夢ではなかったらしく真昼が周を覗き込む

ように静かに立っていた。
「……今何時だ」
「午後七時ですね。数時間寝ていました」
淡々と答えた真昼は周が体を起こすのに合わせて、コップに注いだスポーツドリンクを手渡してくる。
ありがたく受け取り口にしたところで、やっと周囲に目を向ける事が出来た。
寝たからか、ほんの少し体調はマシになっていた。
頭がひんやりしている事に気付いたので額を押さえてみれば、布のようなすこしごわついた感覚が指先に返ってくる。
この家にある筈のない冷感シートが貼られていた、と気付いて真昼を見上げれば「家から持ってきました」と端的な返事があった。
この家には冷感シートもないし、なんならスポーツドリンクすらない。スポーツドリンクも彼女が持参したものなのだろう。
「……わざわざどうも」
「いえ」
素っ気ない返事に苦笑するしかない。
罪悪感からか看病を申し出ただけで、周と話したい、という訳ではないだろう。そもそも、

ほとんど顔見知り程度の男の家で二人きり、といった状態で親しげに話せるとも思わない。
「とりあえず、机の上にあった薬はこちらに持ってきました。お腹にものを入れてから飲むのが望ましいですけど、食欲はありますか」
「ん、まあそれなりに」
「そうですか。じゃあお粥作っていますからそちらをどうぞ」
「……え、椎名の手作り？」
「私以外に誰が居るというのですか。嫌なら私が食べますけど」
「いや食べます食べさせてください」
まさか看病してもらった上に手作りのお粥を用意してもらえるなんて露とも思っておらず、一瞬狼狽してしまった。
正直真昼の料理の腕は未知数なのだが、家庭科の授業で失敗しただのなんだのそういう噂は聞いた事がないので、ひどいという訳でもなさそうだ。
即座に頭を下げて食べると返事した周に真昼はやや呆れた目を向けたものの、頷いてサイドテーブルに乗せてあった体温計を手渡す。
「持ってきますから、熱を測っておいてください」
「ん」
言われた通りにシャツの前を開けて体温計を取り出したところで、真昼がばっと顔を逸らす。

「私が部屋を出てからにしてくださいっ」
声をほんのりと荒げた真昼を見れば、うっすらと頬が赤くなっている。
別に女子と違って男の胸板なんて隠すものでもないだろうに、と周としては不思議だったのだが、あまり肌色に免疫がないのか、前を開けただけで真昼は分かりやすくうろたえていた。
白い頬を淡く薔薇色に染めた真昼は相変わらずそっぽを向いていて、ぷるぷると震えている。
心なしか耳も色づいているような気がして、真昼の恥じらい具合が見えた。
（……あ、なんか周りの男が可愛い可愛いって言ってたのちょっと分かる気がした）
周にとって真昼は確かに美少女だと思っているが、別にそれ以上の感想は浮かばなかった。
綺麗で可愛い、それは間違いないが、それだけだった。
作り物の美を見ている、といったらいいのか。芸術品に近しいようなイメージで捉えていた。
しかしながら、今こうして微かな恥じらいを見せ慌てている真昼は、なんというか人間らしさを見せていて、妙に可愛らしかった。
「……じゃあさっさとお粥取りに行けばいいのでは？」
「い、言われなくてもそうします」
ただ、素直に可愛いと言う間柄でもなかったし、言ったら確実に変な目で見られそうなので感想は飲み込んだ。
興味なさそうにそう言えば真昼はぱたぱたと足早に部屋を出ていく。

多少もたついていたのは、動揺からか、部屋の乱雑具合からか。恐らく後者だろう。
ぼんやりとそれを見送ってから、周は改めて何でこんな事になったんだか、とそっとため息未満の息をこぼした。
（……まあ、責任感と罪悪感からだろうな）
普通、よく知らない男の家に上がり込んで看病なんてしようとは思わないだろう。もし襲われでもしたら大事なのだから。
そのリスクを携えてまで看病を選択したのだから、よほど気に病んだらしい。それにプラスして、周の態度が明らかに興味がなさそうだったから、というのが安心させる要因だったのかもしれない。
何にせよ、真昼は割と仕方なく看病してくれている、というのは間違いないだろう。
「……持ってきましたけど」
少し熱で浮かされた頭でそんな事を考えながら待っていたら、遠慮がちに扉がノックされる。
どうやら服を整えたか心配だったらしく入ろうとしない真昼に、今更そういえば服緩めたのは熱を測るためだったな、と思い出した。
「まだ熱測ってない」
「私が居ない間に測っておくようにと言ったつもりだったのですが……」
「ごめん、ぼーっとしてた」

素直に謝って体温計を脇に挟むと、ほどなくすればややくぐもった電子音が流れる。
ひょい、と持ち上げて画面を見れば、三十八度三分と表示されている。病院に行くほどではないが、それなりに高い数字だった。
服を整えてから未だに入ってこようとしない真昼に「いいぞ」と声をかけると、土鍋を乗せたお盆を携えておずおずと入ってくる。
目に見えて安堵しているのは、服が直されているからだろう。
「何度でしたか」
「三十八度三分。薬飲んで寝たら治る」
「……市販の薬はあくまで対症療法であって、ウィルスそのものを退治してくれる訳ではないですからね。ちゃんと体を休めて免疫機能に仕事してもらってくださいよ」
ちくりとお小言をもらったものの、心配からだと分かるのでなんとなくくすぐったかった。
まったく、とため息をついた真昼はサイドテーブルにお盆ごと土鍋を置き、蓋を開けた。
中には、梅が入ったお粥。胃の負担を考えてか全粥ではなく水分量多目のようで、七分粥くらいだろう。
梅が入っているのは、味というよりは風邪によいと聞くからだろうか。
湯気はたっていないがほんのりと温かさは伝わってくるので、作りたてというよりは意図的に冷まされた、といったものだろう。

粥をじっと見つめる周をよそに、真昼は手際よくお椀にお粥を注いでいる。軽く実をほぐしてくれていたが、種はご丁寧に取り除いていたらしく、あっさりと赤い身が白に混じり込んでいった。

「どうぞ。多分熱くはないですから」

「ん、さんきゅ」

受け取ったものの、スプーンを握ったままじっと粥を見る周に、真昼も訝っている。

「……何ですか、食べさせろと言うのですか。そんなサービス承っていませんけど」

「誰も言ってないから。……いや、料理も出来るんだな、と」

「一人暮らししているんですから当たり前です」

ちゃんと自活出来てない周には、割と痛い言葉だった。

「藤宮さんは料理の前にまず部屋を片付けた方がいいですよ」

「ごもっともで」

大体考えてる事が分かったらしい真昼がすかさず釘を刺してくるので、周は軽く呻きながら誤魔化すように粥をスプーンで掬って口に運んだ。

舌に広がるとろみのついた粥の味は、やはりというか米の味を生かして塩は控えめだ。

ただ、ほぐされた梅干しのまろやかな酸味と塩味が味を引き締めて丁度よいバランスに仕上げてある。

あまり周は塩辛い梅干しは好きではなかったが、ほんのりと甘さを感じるマイルドな酸味は好みの味で、健康であればそのまま白米に載せたり茶漬けにしたりしたい味だった。
「うまい」
「それはどうも。お粥ですから誰が作ってもそう変わりませんけどね」
澄ました顔で返した真昼だったが、微かな笑みが浮かんでいる。
学校でたまに見かける、外行きの笑顔とはまた違った安堵の含まれた微笑(ほほえ)みに、つい凝視してしまった。
「……藤宮さん？」
「いや、なんでもない」
一瞬だけ浮かんだ柔らかな笑みがすぐに消えてしまったのは、なんだか勿体(もったい)ない。
そう思いはしたが口にせず、周はまたも誤魔化すようにお粥をちびちびと口に運ぶのだった。

「……とにかく、今日は安静にする事。水分補給はしっかりしてください。あと汗拭くならこっちを。洗面器にお水を入れてますから、濡らして絞って拭いてくださいね」
食後、真昼はせっせと未開封のスポーツドリンクや水を張った洗面器とタオル、予備の冷感シートを用意してサイドテーブルに置いていた。
流石に顔見知り程度の異性の家に泊まる訳にもいかないだろうし、周としてもそれは居たた

まれないので、その行動はありがたかった。
じっと周が見つめる中、真昼は不備がないか確認している。
（……義務感でやってるわりにはまめまめしいよな）
口はシビアで淡々としているのに、やっている事は甲斐甲斐しい真昼に、なんというか周も段々慣れてきて苦笑が浮かんだ。
（関わるのはこれっきりだろうに、ご丁寧な事で）
恐らく、もう彼女と関わる事もないだろう。たまたま縁で看病してもらっただけなのだから。
そう、もう彼女と接触する事はないのだから、一つ、気になった事を聞いてもよいだろう。
薬も効いてきたのか、倦怠感はあまり薄れていないが熱はすこし引いたように思える。思考が寝る前より覚めていた。
「なあ、聞いてもいいか」
「なんですか」
必要なものをセッティングした真昼がこちらに顔を向ける。
「なんで雨の中ブランコ漕いでたんだ。彼氏と揉めたとかか」
気になっていたのは、そもそも看病してもらうきっかけになった、昨日の事だ。
雨の中ブランコでゆらゆらとしていた真昼は、どうしてあそこに居たのか。
どこか、迷子の子供のような眼差しをしていた彼女が気になったからこそ、ああして傘を押

し付けたのだ。
しかし、あんな表情をする理由が分からない。
誰かを待っていたようにも思えたから、当てずっぽうで付き合っている男がいて揉めたんじゃないか、という安直な予想だったのだが、真昼は呆れたようにこちらを見ている。
「生憎と、彼氏なんて居ませんし作る予定もありません」
「は？　何で？」
「逆に何故私が交際している前提なのですか」
「あれだけモテてればそりゃ一人や二人居るかと」
こうしてやり取りをしている周にとっては、割と人間味に溢れたちょっと気の強い普通の少女なのだが、周囲にとっては違うだろう。
清楚可憐で大人しく謙虚な美少女。天使と称されるほどの端整な美貌は目を惹くし、小柄ながら起伏の豊かな体つき。儚げで守りたくなるような雰囲気は、スタイルと相まって男子の理想を体現したような姿だ。
その上で成績は首席をキープ、スポーツも万能、おまけに今日知ったが料理も恐らく上手い。それはさぞ人気にもなるだろう。
言い寄られているのはチラッと見たことがあるし、級友の結構な数が真昼に好意を持っているのも知っている。

だからこそ、より取りみどりの状態で誰とも交際していないなんて、思わなかった。
そういった意味での一人や二人という表現なのだが、その言葉を聞いた瞬間、真昼の表情が強張って、それから歪んだ。
「居ませんし、何人もの男性と交際するほど節度のない人間になった覚えはありません。絶対に、ありえないです」
ゾッとするほど冷えた瞳で、淡々と否定する真昼に、周はすぐに何かしらの地雷を踏んだのだと理解した。
風邪を引いているせいなのかもしれないが、一瞬悪寒がした。心なしか部屋が肌寒く感じる。
「ごめん、そういうつもりじゃなかった。謝る」
「……いえ、こちらこそ熱くなってすみません」
ただ、頭を下げればすぐに冷えた空気は霧散した。
熱くなったというよりは空気が吹雪いていたようにも思えるのだが、敢えて指摘はしなかった。
「とにかく、あの時のはそういった類いのではなく、ただ頭を冷やしたかったからです。……心配してくれたあなたに風邪を引かせたのは申し訳なく思っていますが」
「いいよ。別に、俺が勝手にした事だし。実際、俺が勝手にしただけだから、罪悪感とか抱かれても困る。椎名と関わるのもこれっきりだし」

やはりというか罪悪感で看病したらしい真昼は、周の言葉の後半を聞くにしたがって瞬(まばた)きをしてどこか不思議そうに周を見ていた。

関わるのがこれっきり、というのが気になったのだろう。

「特に接点ないし当然だろ。いくらお前が学年一の美人だの才女だの天使だの言われてるからって、どうこうするつもりはないよ。恩に着させてあわよくば、とか考えてると思ったか？」

ちょっと気まずそうに目を逸らした真昼に、やっぱりかと苦笑が浮かぶ。

これは、本人が自意識過剰というよりは、実際にそういう事があったのだろう。

美少女に恩を売って関わりを持とうとする、というのはあり得る手法である。

そういう事を幾度か経験しているらしい真昼が、あの雨の日に警戒したのも頷ける話だ。自衛のためなのだから、責められた事ではない。

「めんどくさいだろ、お前だって。好きでもない男に構われるの」

「それはそうですが」

「やっぱりか」

本人が肯定した事が、ちょっと面白かった。

大人しく優等生で愛らしい天使と騒がれる彼女も、やはり好き嫌いはあるし煩(わずら)わしく思う事もある。少しだけ親近感が湧(わ)く。

真昼としては失言だったようで、失言を引き出した周をほんのりと恨みがましげに見ていた。

それが何より、真昼がちゃんと感情のある人なのだと証明している。
「別にいいと思うぞ？　むしろ安心した。天使も人並みにそういうのは迷惑なんだなって」
「……止めてくださいその呼び方」
どうやら天使と呼ばれているのは恥ずかしいらしく、不服そうな眼差しが継続している。
それも面白くて、周はまた笑った。
「まあ、だから用事もないのに、わざわざ関わる事はないよ」
そう言い切れば、真昼は少しだけ驚いたように目を丸くして、それからほんのりと苦笑を浮かべた。

ぺこりと頭を下げて帰っていった真昼の事を思い出しながら、周はベッドでぼんやりと天井を見上げる。
薬は効いていたものの、やはりというか体はまだだるいし気を抜けばすぐに睡魔に引きずられるだろう。
瞳を閉じて、今日あった事を思い返す。
天使（毒舌系）に看病されたなんて、誰に言っても信じないだろうし、言う事でもない。
今日あった事は、周と真昼だけの秘密だ。
秘密、というと妙にくすぐったく感じてしまう。ただ面倒だから他人に言わない方がいい、

という判断なのに。

翌日からは、顔見知りの他人。

そう言い聞かせて、周はゆっくりと意識を沈めた。

第３話　天使様のおすそわけ

宣言通り、周と真昼は顔見知りの他人という関係のままだった。

看病された翌日には元気になっていて、コンビニに買い出しに行く際にたまたま真昼と顔を合わせたが、特に話す事もなかった。ただ、真昼が元気そうな周の姿に少し安堵したのは見えた。

週明けで学校が始まっても、変わらない。他人のまま。

ただ、少しだけ変化があったとすれば、通学の時に出会えばぺこりと会釈されるようになった程度であろうか。

「おー周元気になったか」

「お陰さまでな」

先週の帰り際は半分死んでいた周を樹も心配していたらしく、昇降口で会って早々に周の体調を窺っていた。土日は『死んでないか』というメッセージが来ていたくらいだ。

問題ないという旨のメッセージを送っても半信半疑だったようで、こうして実際会ってピンピンしている様子を見て樹はわざとらしく安堵した風に息を吐いた。

「いやー、あんだけ体調悪そうにしてたらそりゃオレだって心配になるわ。まあ治ったんならいいけどな、お前もう少しまともな生活しろよ。まず片付けろよ」
「どっかの誰かみたいな事を」
「ん？」
「いやなんでも。……この土日で思い知ったから、近々片付けるよ」
いや今すぐ片付けろよ、とすぐに突っ込まれたものの、敢えてスルーした。
あれは恐らく、半日では片付かない。
ぷい、とそっぽを向いた周に樹も追及こそしなかったが、呆れた顔だった。
「ま、お前んちだから好きにすればいいけどさ。今度行く時は足の踏み場ぐらい作ってくれよ」
「……善処する」
渋い顔をしつつ上履きに履き替えて校内に入って教室に向かっていたが、やけに騒がしい教室があってつい横目に見てしまう。
窓から覗いたその教室には、相変わらずの美貌を発揮している真昼がいて、男女問わず囲まれている。
話しかけられれば静かな微笑みを浮かべて応対している彼女の姿に、なんというか先日の真昼とは全然キャラが違うな、と自然と苦笑いがこぼれた。
その様子を見た樹も同じように視線を滑らせて、真昼の姿を捉えて得心の様子を見せる。

「ああ椎名さんか。相変わらずの人気っぷりというか、まあ美少女だからなあ」
「何たって天使様だからな。……樹も椎名を可愛いと思うのか」
「そりゃまあな。ただ、オレにはちぃが居るから、単なる鑑賞用って感じだけど」
「のろけは結構ですー」
樹にはちぃ、正確には白河千歳という彼女が居る。
これまた相思相愛の非常に仲むつまじいカップルで、一緒に居る姿は見ているこちらが胸焼けしてくるほどだ。
のろけはほかのところでやってくれ、とひらひら手を振った周に、樹は気分を害した様子はない。いつもの事なので「つれないやつめ」と笑っている。
「周こそ、椎名は可愛いとは思わないのか？」
「美人だな。それだけだ」
「淡白だな」
「俺らには手の届かない高嶺の花みたいなもんだろ。関わる事なんてないし、見てるだけで充分だわ」
「違いない」
何の因果か先日は看病してもらうというハプニングがあったが、元々住む世界が違うのだ。
周が真昼と仲良くなる、なんて未来なんてありはしない。優秀な人間は優秀な人間と惹かれ

合う。
自分でも駄目男の自覚がある周と、可愛らしく何でも出来る真昼がどうこうなる事なんてまずないのだ。
そう、関わる事自体もうないと思っていたのだ。

「……何食べてるんですか」
それが覆されたのは、ベランダでゼリー飲料を飲みながら外を眺めている時だった。
コンビニに寄るのも面倒で、家に常備しているゼリー飲料を吸いながら柵に体を預けて外の空気を吸っていたら、たまたま真昼がベランダに出てきた。
周の姿を見つけた真昼は同じようにベランダの柵から少し顔を出して、それから周が口にしているゼリー飲料を見て眉をほんのりと寄せている。
周としては、まさか話しかけられるとは全く予想しておらず、しばらく呆けたように固まってしまった。
「見れば分かるだろ。僅か数十秒でエネルギー補給出来るゼリー」
「……まさか晩御飯だと言いませんよね？」
「そうに決まってるだろ」
「食べ盛りの男子高校生がたったそれだけ？」

「余計なお世話だ」

普段はコンビニ弁当やらスーパーの惣菜を食べているので、ここまで軽食ではない。今日は晩御飯の調達を怠ったしカップラーメンの気分でもなかったのでこうしたゼリー飲料を飲んでいるだけである。

恐らくこれでは足りないので、後にスナック菓子か何かをつまむ事になりそうだが。

「料理は……聞くまでもないですね。料理出来なさそうですし。料理も掃除も出来ないのによく一人暮らししてますね……」

「うるさい。関係ないだろ」

ちくりと刺された事は事実なので、やや眉が寄った状態で飲み残していたゼリーを吸いきる。

掃除云々については先日思い知らされたのでどうにかする予定なのだ。とやかく言われると逆にやる気が萎えてきてしまう。

何故こうも小うるさく言ってくるのか、と逆に不思議でならないのだが、真昼はそんな周の事をじーっと見て、それからそっとため息をついた。

「……待っていてください」

そう言うや否や、真昼はベランダから部屋に戻っていった。

カラカラと窓が閉まる音を聞きながら、周は「一体何なんだ」とこぼす。

待っていろ、と言われても何を待てと言うのだろうか。

訝(いぶか)るような眼差(まなざ)しを真昼の部屋の方に向けても、返事は当然ない。
(そろそろ冷えてきたし中に入りたいんだが)
待てと言われて一応待機しているものの、秋の夜は思ったよりも冷えるのだ。スウェットでは肌寒いものがある。
そもそも何故律儀に待っているのか、自分でも分からなかった。
その内息が白くなりそうな気温の中深く息を吐くと、玄関の方から電子音が響く。
来客を知らせる音に振り返った。
来客の心当たりなんて、一人しかない。
本当に何故なのか分からず、散乱した服や雑誌を避けて歩きながら玄関に出る。
覗き窓から見ずとも誰か分かるので、サンダルを足に引っかけチェーンを外してドアを開ければ――予想通り、周の目線より低い位置に亜麻色の髪が揺れていた。
「……何してんのお前」
「あまりにもあなたが不摂生すぎて目に余ったんです。……残りですけどどうぞ」
つん、と素っ気ない声と共に、真昼は手を前に出す。
周よりも一回りは小さく華奢(きゃしゃ)な手には、タッパーが乗っている。半透明の蓋(ふた)からは、煮物らしきものがぼんやりと見えた。
まだほんのりと温かいのか、僅かに蓋が曇っているため何となくでしか分からないが、間違

いなく煮物だろう。

ぱち、と瞬きを繰り返すと、何故だと問いたい周の眼差しを理解したらしい真昼からは深いため息が返ってきた。

「あなたがちゃんと食べないからです。栄養補助食品は補助であってそれを主食にしてはいけません」

「おかんか」

「私の主張は一般的だと思いますけど。あと、部屋は整理整頓しておくべきでは？　足の踏み場なかったんですけど」

ちら、と周の後ろを見て分かりやすく呆れたように瞳（ひとみ）を細めている真昼に、周はぐ、と言葉を詰まらせる。

「……多少はある」

「ないです。普通床に服は落ちてません」

「落ちるものなんだよ」

「洗って干して畳んで仕舞えばなりません。雑誌は読まなくなったらまとめて縛る。踏んで滑って転んだら大事なんですからね」

言葉にはほんのりトゲがあるような気がしなくもないが、真昼は何故か純粋に心配してくれている、というのも分かるので、全部突っぱねる訳にもいかない。

そもそも、看病の時も部屋の雑多さに一緒に転びかけていたので、言われても仕方ない。

ぐぬぬ、と表情を歪めるも反論出来ない周は、むっつりと唇を閉じて真昼の手からタッパーを受け取る。

じわりと掌に伝わってくる温もりは、寒くなりつつあるこの時期嬉しいものだった。

「で、これ食べていいのか」

「要らなければ処理しますけど」

「いやありがたくもらうよ。天使様の手料理なんて普通食えないだろうし」

「……それやめてください、本当に」

意趣返しとばかりにからかうように学校での通称を呼べば、分かりやすく白い頬が赤みを帯びた。

本人的には、天使と呼ばれる事は恥ずかしくて仕方ないらしい。周もその立場になれば間違いなく嫌なので、当たり前と言えば当たり前なのだが。

頬を紅潮させてちょっぴり涙目で恨みがましげに見上げてくる真昼の姿に、周はつい笑みをこぼした。

「ごめんって、もう言わないから」

これ以上は確実に機嫌を損ねるのが明白なため、あまりからかうのもよろしくない。そもそも、そこまで親しくないのだからやりすぎはよくないだろう。

真昼もこれ以上言われたくはないらしく、こほんと咳払いをして気を取り直したと主張している。

微妙に頬は赤いので、あまり変わった風には見えなかった。

「まあ、これはありがたくもらうけどさ。別にあの時の事は気に病まなくていいんだぞ」

「別に、あれは看病で相殺しました。これは、私の自己満足というか……あまりにもあなたがロクな生活をしていないのが見えて、気になっただけです」

「さようで」

情けない姿しか見られていないので、そういう判断がなされるのはある意味当然なのかもしれない。

今も周の後ろでは色々と転がった廊下が見えているだろうし、看病でうちに上がった時に全て見られているのだからもう隠しようがなかった。

「……ちゃんとご飯食べて、規則正しい生活をするのですよ？」

「おかんか」

大真面目に諭してきた真昼に、周はちょっと疲れたように突っ込んだ。

もらったおすそわけを手に家に戻った周は、スーパーでもらった割りばしを用意してリビングのソファに腰かける。

真昼に押されてもらったが、果たして味はどうなのだろうか。

お粥は美味しかったと思う。若干風邪で舌が鈍っていたが、生米からきっちり炊かれただろう粥は、胃に優しくじわりと染みる味だった。

恐らく、あれを見た限り真昼は料理も上手いと思うが、実際はどうなのか。

若干の期待と躊躇いを抱きつつタッパーの蓋を開けると、ふわりと漂う如何にも煮物の香り。

幾つかの根菜と鶏肉が炊かれたものだ。煮汁の色はやや薄めで、鮮やかな人参の色や飾られたさやいんげんがよく映えていた。

一口大にサイズを合わせて切られた彩りのよいそれらは、ゼリーだけしか食べていない周の食欲をこれでもかとそそった。

早速と割りばしを手早く割って、まずは大根を口に運ぶ。

「うま」

味の是非は、すぐに出た。

健康志向な真昼らしく、味付けはやや薄めでだしを効かせた味付け。それも市販の顆粒だしではなく、きっちりと鰹節と昆布から取ったものだろう。旨味が全く違う。

噛み締めると柔らかく口に広がるだしと調味料、そして野菜本来の味。

野菜の旨味を生かしつつ味を整えており、しっかり中まで味の染みた煮物は、あまり好き好んで野菜を摂取しない周でも非常に美味しくいただけるものだった。

野菜をメインに食べなさい、と言わんばかりにやや控え目に入った鶏肉もぱさつきは一切な

くふっくらとした仕上がり。量以外文句の付け所がない。
女子高生が作るには些か選択が地味で渋いが、作り手の力量がよく分かる。
料理を覚えたての人が作るものとはかけ離れた味と言えよう。
これに米と味噌汁かすまし汁があれば尚よかったのだが、生憎ご飯は炊いていない……というか米すら切らせているので、ささやかな希望も叶わない。
今更ながらに、レトルトのご飯パックでも買っておけばよかったと後悔していた。
「すげえな天使」
勉強も運動も家事全般も完璧にこなせるのか、と恐らく本人が聞いたら嫌がりそうな呼び方をして褒めた周は、手を止める事なく理想的な味付けの根菜の煮物に舌鼓を打った。

「これ返す。うまかった」
翌日の夜、周は借りていたタッパーを持って真昼の家を訪問していた。
周は確かに家事が苦手ではあるが、洗い物が出来ないほどでもない。念入りに洗って乾かした上で返すのが礼儀だろう、ときっちり洗浄したものを携えている。
チャイムを鳴らされた時点で周だと予想していたらしい真昼は、誰かと窺う事もなく表に出てきた。
ボルドーのニットワンピース姿の彼女は周の姿を認め、緩く瞳を細める。

ちらりとタッパーを確認して「ちゃんと洗ったんですね、えらいです」と子供を褒めるように言われたので周は思わず眉をほんのり寄せた。

「わざわざありがとうございます。じゃあどうぞ」

真昼がタッパーを回収した、そこまではよかったのだが、今度はひょいと別のタッパーが周の手に載せられる。

やはりというかほんのりと温かい。

中身は恐らく豚と茄子を炒めたものだろう。冷め具合的に蓋が曇るほどではなかったらしく、しっかりと茄子の色と火の通った豚肉や振りかけられた胡麻が視認出来る。

色からして、炒めたタレは恐らく味噌味。ほんのり焦げ色のついた茄子と照りのある豚肉が食欲をそそった。

美味しそうだとは思う。

思うが、何故また渡されたのかが分からない。

「いやあの、タッパー返したんだけど」

「今日の晩ご飯です」

「うん分かるけどな」

「一応聞きますが、アレルギーないですか？　好き嫌いは受け付けませんが」

「ないけどな？　いやまたもらうのは」

二日連続晩ご飯をおすそわけしてもらうというのはどうなのだろうか。
栄養が片寄っている身としてはありがたいし、なにより真昼の料理の腕前は同年代の女子より遥かに上で、味も間違いないだろう。
きっとこのタッパーの中身も美味しい筈だ。
ただ、これが同じ学校の人間に見られていたら大惨事になりそうだ。もちろん周の平穏な学生生活が、という意味で。
このマンションは一人暮らし向けではあるが、設備や立地的に家賃がお高め。真昼以外に同じ学校の生徒は見た事はないので目撃に関しては心配要らないだろうが、それでもこういった関わりを持つのはやはり少し躊躇われる。
「一人だと作りすぎますし、もらってくれたらありがたいです」
「……そういう事ならありがたくもらうけどさ。普通こんな事してたら、相手が好意持たれてるんじゃないかと勘違いするぞ」
「しますか？」
「いーや、ないな」
馬鹿なんですか、といったものを感じる眼差しで見られれば、そんな勘違い出来る筈がない。
そもそも、真昼のような美貌の才女がだらしないと最近痛感してきた周のような男に好意を向ける事が想像出来なかった。

確かに、可愛い隣人からおすそわけしてもらう、なんてラブコメ漫画のような展開なのかもしれないが、互いにラブはないし、会話にコメディさの欠片(かけら)もない。ついでに周の家には米もない。

あるのは、天使様の言葉のトゲと哀れみからの温情くらいだ。

「じゃあ問題ないでしょう。どうせあなたはコンビニ弁当とスーパーの惣菜で済ませてそうですからね」

「何故分かる」

「どう見てもキッチンがろくに使われた形跡がなかったですし、コンビニやスーパーの割りばしが机にたくさんありましたからね。あとあなたの様子で考えなくても分かります。それに不健康そうな顔ですし」

家に一度あがった時に見ただけでそれだけ見抜いてくる真昼には周も頬をひきつらせたが、本当に的確に当たっていたので何も言えなかった。

「……じゃあ、私はこれで」

ぺこ、と言うだけ言って渡すだけ渡し、真昼は家の中に戻っていく。

じゃらりと扉の内側でチェーンのかかる音を聞きながら、周は受け取ったタッパーを見る。

掌の中でほんのりと温もりを伝えてくるおすそわけに、そっとため息をこぼして周も自宅に戻った。

いただきものの茄子と豚肉の胡麻味噌炒めはやはり美味しくて、米が無性に欲しくなった。

結局のところ、毎日タッパーを引き換えるごとに中身の入ったタッパーが手に渡るため、周の食生活は劇的に改善されていた。

真昼の料理は、味付けは濃くはないがどれもこれもご飯が欲しくなるため、晩ご飯にはレトルトのご飯を用意して一緒に食べるようになっている。

料理自体は和洋中なんでもござれなのかジャンルは様々なものが毎日代わる代わる詰められていたが、どれもこれも美味しいので非常に食が進んで辛い。

毎日もらえると期待するのは悪いしおこがましいのだが、餌付けされているに近いので食べられないと恋しさを覚えてしまうほどだ。

天使の料理は依存性が高いのかもしれない。悪いと思いつつも素直にタッパーを受け取ってしまって、つい舌鼓を打ってしまう。

「……最近顔色いいな。食生活見直したか？」

晩ご飯でいくらか栄養を補給しているせいか、顔色もよくなったらしく、昼食時に樹がまじまじと見つめてきた。

学食で頼んだうどんをすすっていた周は、相変わらず鋭い樹に少し冷や汗をかく。

「樹、俺はお前が怖い」

「なんでだよ。つーか図星？」
「いや……まあ、見直さざるを得なかったというか」
真昼がマンションですれ違う度にちゃんとしなさいと軽くお説教をするし、晩ご飯のおすそわけがあるので、自然と生活自体の質が向上したのだ。
天使さまさまと言いたいところではあるが、ちょっぴり余計なお世話だという感情もあったりする。
若干口を濁しつつも肯定した周に、樹はさも愉快だとけらけらと笑っていた。
「そりゃそーだろな。お前不健康そうな面だし実際生活習慣くそみたいだからな」
「うるせえ」
「しかしまた、なんで見直そうと？」
「……強制的に？」
「ははあ、母親にでもばれたか」
「……当たらずも遠からずだな」
真昼のあの口ぶりはおかんといった表現に近い。
おかんというにはあまりにも若々しい上に可愛らしいが。何故かせっせと世話を焼いてくれる真昼の事を拒絶する気にはなれなかった。
「なあ樹。俺ってそんな不健康そうか？」

「おう。元々色白ってのがでかいな。あと背は高いがひょろいし、やる気無さそうな顔してるし、面構えが不健康って感じだ」
「顔は元からだ」
「知ってる。もっと生気に満ちた顔したらどうだ」
「無茶言うなよ。……そうか、死んだ顔してるのか……」
自分の顔なんてあまりまじまじと鏡では見ないものだから分からなかったが、他人にはあまり生気がないように映るらしい。
もしかしたら、周の普段の表情が死にかけに見えたから、真昼も心配したのかもしれない。
「周はもう少し周囲の見る目を気にするべきだろ。いつも視線が下がってるし雰囲気がとっつきにくいし、そもそも人寄せ付けようとしてないし。パッと見は根暗そのものだぞ」
「さりげなくけなしたなお前」
「いやー飾らないから野暮ったい上に顔が死んでんだから仕方ないだろ」
これを機に少しは健康と一緒に身だしなみに気を使えよ、と樹からもお節介の言葉をいただいたので「余計なお世話だ」と返して、周はそっぽを向いた。

第4話　偶然の出会い

「あ」

鈴を転がすような声が、背後から聞こえる。

最近は聞きなれてきた声ではあるものの、ここはマンションではない。近所のスーパーマーケット、その菓子売り場である。

一応人の目がある場所で彼女が周(あまね)に反応するとは思ってもおらず、周も困惑しながら振り返ればやや目を丸くした真昼(まひる)が立っていた。

手にはスーパーのかごが提(さ)げられており、中には本日の夕食に使うのか大根一本と豆腐、鶏もも肉に牛乳が入っている。

菓子売り場にふらりと立ち寄ったところで周と遭遇した、そんなところだろう。

「言っておくが、たまたまだ。尾行してる訳じゃないからな」

「知ってます。最寄りスーパーが互いにここな事くらい分かりますので」

先んじて言えば「むしろ何でそういう発想になったのか」と呆(あき)れた風にこぼして手にしているメモに目を通している。

きっちりと必要なものを書き留めているのは几帳面そうな真昼らしい。
可愛らしい花柄のメモに書かれた内容にしっかりと目を通したらしい真昼は、お菓子コーナーには見向きもせずその向かい側にある調味料の棚を眺めている。
しょうゆとみりん、と可憐な声で実に家庭的な品物を探している姿は、可愛らしくもあったがなんというか不思議な気分でもあった。
「みりんはこっちだぞ。ほら」
「あ、そっちじゃなくてみりん風の方です。未成年じゃ買えないですから」
「これ酒扱いなのか」
「甘いお酒扱いですからね。料理酒は塩を添加して飲用ではなくしてるので未成年でも買えますけど」
みりんを渡そうとすればそう言って首を振り、みりん風調味料をかごに入れている。
清々しいほど家事をしない周には初耳だったので、おもわず「へえ」と相槌を打ちながらぱたぱたと動く彼女の背中を視線で追いかける。
醤油が陳列されている棚をじーっと見ている真昼は、値段の書いたポップに気付いたようでむむ、と眉を寄せていた。
「……大特価お一人様一本限り……」
予備も買おうとしていたらしい真昼が残念そうに呟き、こちらを見てきた。

「買えばいいのか」
「話が分かる人で助かります」
彼女の言わんとする事は察したので苦笑しつつ醤油のボトルを手に取れば、満足げに唇がほんのりと弧を描いた。
「……案外節約するんだな」
「節約、というよりは安く済むなら済ませるだけです。無駄があれば省くでしょう」
「日本人らしい気質というかなんというか。……ま、親からの仕送り生活ならそうだわな」
周も一人暮らしといえど、親に養ってもらっている。
割と裕福な家庭に生まれたからこそああいう綺麗で安全なマンションに住まわせてもらっているし、生活費も切り詰めなくていい程には余裕がある。本当に親には感謝していた。
学費もあるし仕送りもそれなりにかかるので、なるべくではあるが無駄遣いは避けていた。
「……そうですね。養ってもらっているのですから、節制は大切です」
真昼は淡々と返してかごの中身を整理している。熱を奪ったような冷えた声だった。
一気に平坦な声になった真昼にたじろいだが、真昼が顔を上げた時にはもういつも通りの顔になっている。
一瞬だけ垣間見せた昏い瞳は、もう見えない。
「……ところで、あなたそれ買うんですか」

話を変えるように、真昼は周の持っているかごに入っていた真空パックの米飯とポテトサラダを見て問いかける。

真昼から分けてもらう料理はもちろん美味しいのだが、それだけでは足りなくなってしまったので、普段はこうして主食とおまけのサラダを用意していた。

「晩飯だからな」

「不健康」

「やかましい。サラダ買ってるだろ」

「ポテトサラダですけどね。……どうしてその生活で体を壊さなかったのか……」

「大きなお世話だ」

もっと野菜を食べるべきでは、と瞳を眇めてこっちに無言の圧力をかけてくる真昼を、周はそっぽを向いてやり過ごした。

何だかんだちょこちょこ話しつつも会計が済んだのでレジ袋に買ったものを詰めるのだが、真昼は鞄の中からエコバッグを取り出してせっせと詰めている。

実に環境的で庶民的な天使様である。

しかし、詰めるのはいいが、量が多すぎるのではないかと少し不安になった。

牛乳に醤油、みりん風調味料の時点で四リットルはあるので、水と比重は違うだろうが確実に三キログラムはあるだろう。その上で食材、それも大根一本丸々買っているのだから、まあ

重い筈だ。

綺麗に詰め込んでまとめているが、これを手にしてマンションまで帰るのは地味に重労働なのではないか。

（結果的に俺が居るから調味料と食材は多目に消費してるんだよな）

恐らく、いつもより多目に作った上で分けているのだろう。いつも分けてもらう分は普通に一食分に近いので、多く作りすぎるからとは言っていたが、最近はわざと多く作っている筈である。

結果的にかなり世話を焼かれているので、さすがにここでなにもしないというのは男が廃るだろう。

詰め終わったところでエコバッグの持ち手を掴んで持ち上げれば、周にはそう重くないが女子には長く持つのは一苦労の重量を感じる。

真昼も運動はかなり出来るようだが、純粋な腕力とはまた別だろう。服越しでも分かるほっそりとした二の腕に力を求めるのは無理な気がするのだ。

周の行動に、ぱち、と焦げ茶の瞳が瞬く。

驚いたようにも、感心したようにも見えた。

「……別に奪おうってわけでは」

「それは心配してないです。……別に、それくらい持てますよ？」

「こういう時くらい素直に甘えといた方が可愛げがあるぞ」
「まるで可愛げがないという言い方」
「学校での態度と俺に対する態度を比べてから言え」
それは自覚しているのか、真昼がややたじろいだ。
学校で見せている、誰もが認める優しく温厚で謙虚な面を、周には見せていない。
正しく言えば、周にも優しくはあるが、言葉が端的と言えばいいのか。彼女の中では周用のオブラートの在庫はないらしい。いつだって率直な意見を述べる。
嘘をつかれるより余程よいので、周としてはあまり気にしないが。
真昼が口をつぐんだのを好都合と見た周は、たくさんの食料品が詰まったエコバッグと自分の荷物を手に、すたすたと出口に向かう。
後ろで慌てたような気配がしたが、周は構わなかった。距離が空こうがお構いなしに進む。
彼女の歩幅に合わせて待ってやりはしない。
ただでさえスーパーでは側に居たのだ。隣に並んで帰宅している所でも誰かに見られれば、面倒な事になるだろう。
互いに、この距離が一番都合がいいのだ。
無関係を装って大きな荷物を携え先を急ぐ周の背中に、小さく「……ありがとうございます」と声がかけられた気がした。

第5話　天使様とお掃除大作戦

周が苦手とするのは家事全般であるが、最も苦手なのは掃除だ。
料理は、怪我を負う事前提に見た目と美味しさは度外視するならば、出来なくはない。
加熱して胃に収まればいいだろ、という考えの下、非常に見かけが悪く味も残念なものであれば、全く作れないという訳ではないのだ。
洗濯はそもそも出来なければ生活に困るので問題はない。いざとなればコインランドリーという手段もあるし、洗濯機に入れて洗剤と水と共に回すだけなので問題なくこなしている。
ただ、掃除だけは周にはどうしようもなかった。
「どうしようか」
休日、真昼にも樹にも片付けろと言われ続け、ようやく重い腰を上げた周だったが、どこから手をつけてよいものか途方にくれていた。
自分が悪いとは分かっているのだが、取り敢えず物が溢れていてどう片付ければいいか手順が思い付かない。
取り敢えずシーツは洗って布団は干した。

ここからどう掃除したらよいのか。
服やら雑誌やらが散らばっているので、割と足の踏み場がない。
不幸中の幸いで、食品関連のごみは流石に匂(にお)ったりするのですぐに捨てるため、異臭がしたり油汚れ等がひどいといった事はない。ただひたすらに散らかっているだけである。
その散らかりがひどいから困っているのだが。
そっとため息をついた時、玄関のチャイムが鳴った。
あ、と声がこぼれる。
もう慣れた来訪者、というよりは渡すだけ渡して帰っていく天からの恵みであり配達人のような存在だが、今この時は救世主のように思えた。
足早に玄関に向かおうとして、足場のなさにすっ転びそうになって壁に手をつきつつ、ドアを開ける。
「すみません、ちょっと先にタッパー回収し……なにやってるんですか」
「……掃除しようとしてた」
体勢を崩しつつ真昼に顔を見せれば、微妙に呆(あき)れたような眼差(まなざ)しを向けられた。
「今すごい音したような」
「……転びかけた」
「でしょうね。掃除、始まってすらないですよね？」

「途方にくれてた」
「でしょうね」
これだけひどければそうもなります、と相変わらずの忌憚ない意見に周も頬をひきつらせるが、否定のしようがない。
それに、ここでふて腐れて彼女を突き返せば、掃除の取りかかりの相談すら出来なくなる。
しかしながら、どう聞いたらいいだろうか。
掃除のコツを聞くつもりではあったが、そもそもアドバイスをくれるだろうか……とやや躊躇いつつ真昼を見たら、真昼は周の背後、散らかった廊下を見ている。
後ろの惨状にうわぁ、と眼差しが語っているので、真昼からしてみれば余程ひどいのだろう。
「全く。……部屋、掃除させてください」
「は？」
周としては、手伝ってほしいとかそういった願いは厚かましすぎるので何か助言をもらうつもりだった、のだが。
まさか、真昼が直々に手伝うなんて申し出るとは思わなかった。
「隣が汚部屋だと思うと嫌です」
別に彼女の言動がやや辛辣なのは最早いつもの事なので怒りはしないし、そもそも事実しか言わないので反論のしようがなかった。

「家事が出来ないのに一人暮らしとか舐めているのですか。時が経てば慣れてくるだろうという楽観視が見てとれます。結果的に出来てないのですから少しは反省したらどうですか」

ぐうの音も出ない。

母親にもこまめにしておけば楽だからね、と言われて放置した結果がこれである。完全に自業自得だとは自覚していた。

「大体ですね、普段からこまめに掃除していればこんな事にはならないのに。日頃の怠慢が表れています」

「……仰る通りです」

ここまで言われて怒りもしないのは、そもそも真昼には非常に世話になっていて頭が上がらない上に、的確に周の心情と過去の行動を当ててきたからだ。

何とかなるだろう、とたかをくくってこうなったのだから、最早周には彼女の言葉に粛々と頷くしかないのだ。

「掃除していいですか、この部屋」

「……お願いしてもいいですか」

「私が持ちかけてるんですから当たり前でしょう。あと、私は準備してきますから、その間に隠したいものや貴重品は納戸に持っていって鍵かけてください」

「そこは心配してない」

なにが悲しくて、言葉は鋭いものの親切心で手伝ってくれる人間に盗難の心配をしなくてはならないのか。

そもそも、これだけ常識的で世話焼きの真昼が他人に危害を加えるなんてまずないだろう。

「……あなたは心配してないんですか？」

「お前がそういう事するなんてまずないだろ」

「いえそうではなくて……ですから、男性的に隠しておきたいものが見られる心配はしてないので？」

「生憎とそんなものは持ち合わせていないな」

「まあ、それならいいのですが。じゃあ、着替えて掃除道具持ってきますので。……徹底的にしますからね、掃除」

肩を竦めて一度自宅に戻っていった真昼に、周は苦笑してその背中を見守った。

再び自宅を訪れた真昼は、先ほど会った時の服装とは違い、白のロングTシャツにカーキ色のカーゴパンツといった姿だ。

体にぴったりと沿うようなTシャツは、華奢ながらしっかりとした起伏のある体を浮き彫りにしている。

長い髪は器用に真ん丸のお団子にしてまとめあげていて、白いうなじが見えているのが妙に

居心地悪かった。
普段ワンピースやスカート姿ばかり見ている身としては、何だか新鮮に見える。
こういったボーイッシュな服装はあまり合わないんじゃないか、なんて思ったのは間違いだった。美人は何でも着こなすし似合う、というのを痛感させられた。
ただ、確かに動きやすそうではあるが、普通に外を出歩ける格好だ。それが汚れていい服装なのかは分からない。
「汚れていいのかそれ」
「どうせ近々捨てる予定があったので、別に汚れてもいいものですよ」
と言いつつ真昼は、改めて周の部屋の惨状を眺め、そっと嘆息。
「言っておきますが、徹底的に、しますよ？」
「……分かってる」
「分かってるなら早速しましょうか。私は甘くないですよ、妥協なんてさせませんから」
いいですね、と有無を言わさぬ声で問いかけられたので、周は「ハイ」と従順に返事をするしかない。
こうして、天使によるお掃除大作戦が幕を開けた。
「取り敢えず服は洗濯かごに放り込んでおきましょう。本来掃除は上から下の順でするのですが、これは掃除機をかける以前の問題です、折角のフローリングが物で隠れていますし。服は

洗うにしても小分けがいいですね、多すぎます。あとこれ着ているもの着ていないもの区別つくんですか。全部洗っていいですか」

「もう好きにしてくれ……」

当たり前と言えば当たり前だが、掃除機をかけようにも床の上が物だらけなので先にそれを片付けるところから始まった。

「……下着とか落ちてないですよね？」

「それは流石にタンスに入ってる」

「ならよろしい。取り敢えず服は後回しでいいでしょう、洗って干すにしても掃除で埃がたちますし場所的に干しきれないでしょうから。急ぎでないなら掃除終わってからでいいです」

「ハイ」

「……で、雑誌ですけど、基本的に処分です。集めているならまた別ですけど、この扱いだとそうでもないでしょうし。必要ならそのページをスクラップにしてあとは処理。束ねて廃品回収に出しましょう」

早速掃除に取りかかっている真昼は、周には落ちている服を洗濯かごに入れる事を指示しつつ、雑誌を片っ端から積み重ねている。

必要な雑誌があるなら今の内に申し出る事、と言われて特に必要としていないので首を振る。真昼はそれを見て持参したらしいビニール紐で手際よく束ねて結んでいた。

「服を集め終わったら他の雑貨類の取捨選択お願いします。落ちている雑貨類も同様に必要なものとそうでないものは分別してゴミに。いいですね」
「……おう」
「采配に不服があるなら速やかに述べてください」
「いや、ないけど……テキパキしてるな、と」
「しないと時間ないでしょう。ぐちゃぐちゃなんですから」
「ごもっともです」
休日とはいえ時間は限られている。掃除機をかけるなら近所迷惑を考え日中にするしかない。その掃除機をかける前段階でかなりの労力がかかると分かっているので、真昼はなるべく急いで片付けに取りかかっているようだ。
ここまでさせてしまって申し訳ない、と思う反面、真昼の采配によってみるみる内に足場が出来ていくのだから、本気で感心もしていた。
「椎名教官……」
「師と仰ぐならまず倣ってください。あなたの私物の仕分けは私には出来ないんですから必要なものだけでもちゃんと分けておいてください」
「イエッサー」
「私を男にしないでください」

さりげなく突っ込んだ天使様は、真顔のまま鮮やかな手さばきで出来うる範囲のものの分別及び断捨離を行っている。

どうしても物を取っておく癖のある周には、真昼の潔さがありがたく、羨ましかった。

他人の部屋ではあるが遠慮なく片付けていく真昼は、実に家庭的で最早主婦並みの動きをしている。

真昼一人でも余裕でこの部屋は片付けられそうなほどに手際がよい。

ただ、急いでいるが故に、足下が疎かになったのかもしれない。

これは間違いなく周のせいなのだが、置いてあった服を踏んでしまったらしく、そのまま真昼はバランスを崩した。

真昼の口から「あ」と声が漏れた瞬間、周は反射で真昼が落ちるであろう床に滑り込んでいた。

ふわりと香る甘い匂い。それに微かに混じってくる埃の匂いは、慌てていたせいで埃がたったからだろう。

尻餅をついたせいで地味に臀部が鈍痛を訴えているものの、許容範囲だ。こちらにもたれかかる真昼の重みを感じながら、軽く呻くだけで済んだ。

咄嗟に受け止められたのは幸いだろう。

「……藤宮さん」

真昼が顔を上げて、微妙に呆れたような視線を向けてきた。怒ってはいないようだが、色々と物言いたげな様子だ。

「転んだ私が悪いのは認めますが、こういう事があるから片付けをするべきだと」

「誠に申し訳ありません、反省しております。……怪我はしてないな？」

「平気です。わざわざ受け止めてくれてありがとうございます。こちらこそすみません」

「いや俺のせいだし……」

ただでさえご飯を分けてもらっていてあまつさえ掃除も手伝ってもらっているというのに、それが原因で怪我でもさせたら目も当てられない。

というか申し訳なさすぎて顔も合わせられなくなるだろう。

望むなら土下座まで視野に入れているのだが、真昼は転んだ事については責めるつもりはないらしい。

「こんな事がないように片付けるんですからね？」

「存じてます。本当に、申し訳ありません」

「……いやそこまで言わなくてもいいです。私が勝手に手伝ってるだけですし」

ちょっとだけ慌てるようにこちらを見上げてくる。

図らずももたれたような体勢から至近距離でのやや不安げな上目遣いとなっていて、周としては非常に落ち着かない。

ただでさえあまり女に縁がない周にはこういった距離は心臓に悪いというのに、美少女と密着しているのだ。

いくら双方に恋愛感情がないとはいえ、なんというかとてもよろしくない気がした。

真昼がこの体勢を意識していないようなので、周はそっと肩を掴んで彼女を剝がし、顔に羞恥がのぼる前に立ち上がった。

「……続き、するか」

「そうですね」

幸いな事に、真昼は周の動揺には気付かなかったらしく、周が差し出した手を素直に掴んで立ち上がる。

真昼はくっついていた事は全く意識していないようで、いつも通りの表情を見せていた。

周としては、まあ真昼のような数多の男に好意を寄せられている少女がこれくらいで動揺する筈もないか、という事で納得は出来たのだが。

平然としている真昼に苦笑して、周も真昼に任せきりでは悪いと気合いを入れて掃除を再開するのだった。

「……びっくりした」

周も慣れない掃除に四苦八苦していたからだろう。

小さく呟かれた言葉と、色素の薄い髪に隠れてほんのりと耳が赤くなっていた事には、つ

いぞ気付かなかった。

「……ふぅ、綺麗になりました」

結局のところ、周の家を掃除するのに一日費やす羽目になった。

床の私物を片付けるのに数時間、それから服の洗濯や棚の上や照明の埃取りやら窓拭きやら掃除機をかけたりしていたらすっかり日も暮れていた。

真昼がやって来た時に見えた太陽はすっかりと姿を隠していて、二人の奮闘がどれ程の時間続いたのか証明している。

ただ、お陰で周の部屋は見違えるように綺麗になっていた。

床には余計なものは落ちておらずフローリングが露になっているし、窓ガラスやサッシには汚れ一つない。照明も埃が取り除かれ以前より明るさが増している。

周の部屋も掃除したが、床に物が落ちていないのでゆったりと寛げるようになっていた。

「ここまでまる一日かかるとは」

「そりゃああれだけぐちゃぐちゃならな……」

「あなたがした事ですけど」

「仰る通りです」

天使様兼救世主様には頭が上がらないので態度だけは平伏しつつ、ここまで尽くしてくれた

真昼をちらりと見る。
わざわざ貴重な休日を費やしてくれた真昼は、まったく、とゴミ袋を縛っていた。
台詞の割には不機嫌そうという訳ではなく、むしろ達成感が見てとれる。ただ、ほんのりと疲労も顔に浮かんでいた。彼女に一日ただ働きをさせたので、当然だろう。
この後彼女に更に夕食を作らせる、というのは気が引けた。
こちらにおすそわけがあろうがなかろうが、疲れているのに更に動かさせるというのが申し訳なかった。
「夕食はもう買い物行く気にもならないし、ピザでも頼むか。さすがに今日は奢らせてください。普段なんかおすそわけめっちゃもらってるし」
「え、でも」
「俺と食うのが嫌なら一枚頼んで持って帰ってくれ」
一緒に食べたくない、というのならそれはそれで仕方ないので一枚持ち帰ってもらえばいい。
一緒に食べたいというよりは労いと感謝の意味なので、一人で食べようが構わないのだ。
「……そうではないですけど。ピザとか、頼んだ事ないから驚いただけで」
「え、ないのか」
「だって、一人なのにピザ頼む事なんてないですし……作る事はしますけど」
「作るという発想に至るのはすげえわ」

普通はピザ食べたい、と思ったら市販品を買うか出前を取るか、もしくは外食をするかの三択になる筈だ。わざわざ生地から作ろうなんて手間のかかる真似をする人間は少ないだろう。

「別に出前とるなんて変じゃないだろ、俺普通に一人で頼むし。あれか、ファミレスも一人で行くの無理系か」

「そもそも行った事ないです」

「そりゃ珍しいな。俺は普通に一人でも行くし、うちの親は手抜きしたい時はファミレス行くけど。お前の親は外食しない派だったのか」

「……うちは、お手伝いさんがご飯作ってたので」

「お手伝いって、結構な金持ちだな」

富裕層の人間と言われたら、納得する。

やけに所作が綺麗だったりしたし、服や持ち物も上等なもの。

品がある雰囲気や教養のあるところを見る限り、むしろそうであっておかしくないといった感じだ。

その本人は周の言葉にうっすらと微笑みを浮かべた。

「そうですね、比較的裕福だと思いますよ」

余計な事を言ってしまった、と後悔したのは、真昼の笑みが喜びでも自慢でもなんでもなく、むしろ自虐的な笑みは、自嘲のものといってもいいからだ。

以前も親の話をしたらどこか冷えた声で返されたし、恐らく親との折り合いがよくないのだろう。

あまり触れてはいけない部分らしいし、これ以上周も知ろうとは思わなかった。

人間、知られたくない、触れられたくない事の一つや二つあるのだ。ノータッチでいるのが、さほど親しくもない相手に対する礼儀だろう。

「まあ、いい経験になるんじゃないのか。ほら、好きなの頼め」

親の話題には触れずに、しまってあったピザの広告を真昼に見せる。

周もちょくちょく頼んでいる店であり、宅配サービスをしている店の中では知る限り一番美味しい店だ。

ピザ窯で焼くような本格的なものには当然敵わないが、スタンダードなトッピングから子供も喜ぶようなトッピングのものまで幅広く取り扱っており、真昼の口に合うようなものも中にはあるだろう。

話題転換に乗っかってくれた真昼はメニュー表を受け取って、早速目を通している。

透明感のある焦げ茶の瞳は、色々なピザの写真に釘付けになっていた。

いつもはあまり感情を浮かべない瞳も、今はどこか生き生きとして輝いているように見える。

（……もしかして、結構楽しみにしてるのか）

心なしかそわそわしているような真昼は、少しの間メニューを見てから「じゃあこれがいい

です」と控えめに四種類の味が楽しめるパーティー向けのピザを指差す。
窺うようにこちらを見てくる真昼に了承すれば僅かに瞳が輝いた。
ほんのりと表情も嬉しそうなので、周はうっすら苦笑しながらスマホを片手に広告に掲載されている電話番号を打ち込んだ。
約一時間後に届いたピザを、真昼は早速食べていた。
四種類の味が楽しめるものなのでどれから食べようかちょっぴりおろおろしていたものの、始めはベーコンやソーセージがたっぷり載せられた味に決めたらしい。
意外ではないが割とお嬢様と発覚した真昼は、小さな口でピザをかじっている。
手掴みであろうと食べる姿にどこか品があるように見えるのは、恐らく教育の賜物だろう。
それでいて、小動物のような小さなものを見て感じる愛らしさにも似た感覚を抱かせた。
伸びるチーズにへにゃりと目を細め、ほんのりと頬を緩めている姿が、妙に可愛らしい。
普段は大人びて見えるし実際落ち着いた雰囲気があるが、今の真昼は年相応の雰囲気だ。
はむはむ、と小さな口でピザを堪能している真昼に、無性に頭を撫でたくなってしまう。
「……なにか？」
「いや、美味しそうに食べるなって」
「あまりじろじろ見ないでください」
ただ、嫌そうに眉を寄せたところは、可愛げもないのだが。

「……なんというか、お前ってほんと可愛げない」
「なくて結構です。むしろ、今更普段の学校のように振る舞ってもあなたは気味悪がるだけかと」
「まあそうだな。学校のお前よりこっちのお前の方が見慣れてるし」
真昼とは学校ではほとんど接点がないし、話した事もない。
ただ、等しく皆に優しく一分の隙もない美しい笑顔をたたえている姿をたまに見かけるだけだ。
代わりに、今目の前では愛想が悪い部分を見ている。
本来の真昼は恐らくこっちで、学校では外行きモードを発動しているのだろう。
「俺としては、こっちの方が疲れなくていいけどな」
「可愛げない方がですか」
「根に持つなお前。……なんというかさ、学校でのお前は何考えてるかちっとも分からんから」
「主に献立と授業内容でしょうか」
「そういうボケは出来るんだなお前」
腹に一物抱えてそう、という意味で言ったのだが、真昼はそのままの意味で捉えたらしい。
本人としてはボケたつもりはないらしく微妙に不服そうな目を向けてくる。
「そうじゃなくて、内心が見えないんだよ。だから、何考えてるか分からないよりは多少愛想

が悪くても素直に感情表現してる方が接しやすいって事だ」
「……学校での振る舞いは、駄目なのですか？」
「処世術なんだろうから駄目とは思わん。ただ、疲れないのかとは思うがな」
「別に。小さい頃からこうでしたし」
「筋金入りか」
幼い頃からの癖ならばあの振る舞いが板につくのも頷けるが、意図的に『理想的ないい子』で居ようとした、せざるをえなかった、という事でもある。
ただ、ほんのりと察する事の出来る家庭環境には、追及などとても出来ない。
「ま、息抜きする場所があるんならいいんじゃないか？　結果的に俺が息抜き相手になってるしな」
「……あなたは見ていて色々はらはらするから息抜きになりません」
「それはすまんな」
大仰に肩を竦めてみせれば、少しだけ真昼がおかしそうに笑った。

第6話　友人の訪問

あの掃除以来ほんの少しだけ、真昼との間にあった壁が薄くなった気がするが、特に距離が近付く訳でもなかった。

学校では全くの無関係だし、夕飯をおすそわけしてもらう時にたまに世間話をする程度。

先日も部屋の維持はきちんとしなさい、といった旨のお言葉をチクリといただいた。何だかんだ言葉はきついが、やはり面倒見はよい少女なのだと痛感する。

きっちり釘を刺してくれるついでにお片付けのアドバイスまでもらっているので、周の家は掃除した時のままで保たれていた。

「おお綺麗になったな」

綺麗になった、という事で休日に樹がやってきたが、よい方向での様変わりした部屋を見て感嘆の声を漏らしている。

「まさかここまで綺麗になるとは。あんな汚かったのにな。前も手伝って片付けたのにすぐ汚したし」

「やかましいわ」

「いやだってなあ。最長何日床にものが落ちてない状態が続いたよ」
「安心しろ新記録だ。二週間は続いている」
「新記録が二週間って事に恥を持とうな？」
普通は床にものを放置しない、と正論を言われて微妙にしかめっ面になるものの、樹は親切心と常識から言っているだけなのであまり拒絶も出来ない。
そもそも、真昼に手伝ってもらう前に樹にも世話をかけていたので、こういった所では強く出られないのだ。
ぐぬ、と押し黙った周に樹が愉快そうに笑う。
「しっかしまあ、ここまで綺麗になったならちぃも連れてこれるなあ」
「やめろ、お前らのいちゃつきを何故自宅でまで見なければいけないんだ」
「遠慮すんなよ」
「俺んちを溜まり場にするな」
何が悲しくて友人カップルの仲むつまじげな様子を見せつけられなければならないのか。
バカップルとの呼び声高い二人のいちゃつく様を見せ続けられるこちらの身にもなって欲しかった。
樹が冗談で言っているのは分かっているものの、しょっちゅう二人の熱を見せつけられている身としてはあまり笑えない。

「まあ冗談として。こんだけ綺麗になってれば汚したりしないよな？」
「善処はしている」
「お前というやつは……まあいいけどな。出したらしまう癖だけはつけといた方がいいぞ」
「おかんか……」
「もー周ったらぁ、ちゃんとお部屋はこまめに掃除しないとだめよー？」
「気味が悪いし地味にうちの母親と口調似てて怖いわ」
わざとらしくしなを作って裏声で注意してくる樹に、周は背筋を震わせる。
樹と母親は面識もない筈なのだがなんだか似ていてぞっとした。
そもそも男が女を強調した仕草をするのが気持ち悪いので即刻やめてほしい。
うぇ、と舌を出した周に樹がけたけたと愉快そうに笑う。
「周の母親はこんな感じなのか。うちはほんと素っ気ないからなー」
「むしろその方が羨ましいわ。うちの母親は事あるごとに構おうとしてくるからな」
「息子想いのいい母親じゃん」
「あれ子離れ出来てないだけだと思うぞ……」
「いや確実に周がだらしないから構わざるを得ないんじゃ」
「やかましい。それ抜きにしても母さんは息子に構いすぎなんだよ」
一人っ子だからなのか、周の母親はしょっちゅう周に構ってくる。

甘やかすとは違うが、とにかくあれこれ世話を焼いたり変な気を回したりするので、嫌いではないもののちょっと相手に困るのだ。

高校に通うため地元から離れて一人暮らしする時にも色々と言われたりしたし、時折抜き打ちチェックにこようとするので結構大変だったりする。

「ま、それだけ周は大切にされてるって事なんじゃないのか？」

「愛が重い」

「諦めるこった。いずれそれがいかに尊いものかって後から思い知るってやつだよ」

「経験則みたいに言ってるけど、お前現在進行形で反抗してないか」

「はっはっは。ちぃの事だからしゃーない」

父親と彼女の件で色々といざこざがある樹が言うとあまり説得力がないのだが、言っている事自体は一理あるため大人しく聞くだけ聞いておく。

こいつはこいつで問題抱えてるんだよなあ、とひっそりため息をつくが、肝心の樹は苦労を窺わせないのんきな表情だった。ただ、「俺とちぃの仲を邪魔するなら馬に蹴らせるつもりだしー」と若干物騒な事を言っていたが。

「とにかく、親父はなんとかするからいいよ。とりあえず周は生活をきちんとしろよー？」

へらりと笑った樹に「言われなくても分かってる」と微妙に渋い顔を作って返して、どっかの誰かさんと同じような事を言うなあ、とそっと苦笑した。

樹が周の家を訪れた理由は生活を見る……ためではなく、単純に遊びにきたからなので、部屋の話は早々に終わり二人でゲームをしていた。

当初の目的は一週間後に控えているテストの勉強だった筈が、いつの間にか遊びに変わっていた。

「お前無駄に回復アイテム使ってたら足りなくなるぞ」

「なんとかなるなんとかなる」

「いや何とかなるってレベル上がってないのにそれ大丈夫な訳……」

スリルを味わうのが好きらしい樹にどう突っ込もうか悩んでいた周だったが、部屋にチャイムの音が鳴ったためにすぐさま別の悩みが生まれてしまう。

「ん？　来客？」

樹もゲームをメニュー画面にしてから顔を上げる。

特に他人にこの家を教えている訳ではないと知っているし、家を訪れる友人もそう居ない。そもそも来客ならエントランスで足留めを食らうので呼び出しがくる筈なのだ。

「なんか分からんな、隣人辺りじゃないか？　回覧板とか」

「なるほどー」

「ちょっと出てくる」

ひきつりそうな顔を何とか隠しつつ適当に樹をごまかして急ぎ足で玄関に向かう。

呼び鈴を押した後に彼女が声を上げなかったのが幸いだった。
こちらも確認せずに手早く扉を開けて、姿が見えないようにするりと隙間から外に出てそのまま扉を閉める。
案の定真昼が居たので、いつもと違う様子の周にぱちりと瞬きを繰り返している彼女に「しー」と人差し指を立てた。
「……小声で頼む。樹がきてる」
「樹？」
「友人だよ。遊びに来てる」
「ああなるほど」
周の隠密行動のような様子に得心したらしく頷いて、それ以上は追及せずにいつものようにタッパーを周に手渡す。
朝から仕込んでいたのだろう。中身がおでんという、寒くなってきた今の季節にぴったりの品だ。
ありがたく受け取った周は、渡す事に疑問を抱いていない真昼にそっと吐息をこぼす。
「いやほんと、お前の事はいつもありがたいと思ってるが、それを言うには時間が足りない。ごめん」
「別に礼を求めてる訳ではありませんので。……よかったですね、友人を招く事が出来るくら

いに片付いて」
「土下座の感謝をした方がいいか」
「違いますやめてください」
私が嫌な女みたいじゃないですか、と呆れた風な眼差(まなざ)しを向けられるので、周も苦笑する。
微妙に本気が混ざってしまったのは、彼女には本当に頭が上がらないからだろう。土下座してもよいレベルで世話になっていた。
流石にこの量を無償でもらい続けるのは色々と悪いので、今度改めて食事代金の話をしたいところである。
「じゃあ、お友達さんが来てるなら、あまり話してもいられないでしょうし。失礼します」
「……いつも助かってる。樹には相手を伏せとくから」
「そうしてください」
「まあ、仮に言ったとしても信じてもらえないだろうな」
「でしょうね」
素直に肯定されるとそれはそれで複雑ではあるものの、周が樹の立場なら、実は俺椎名(しいな)にご飯作ってもらってる、と言われてもまず信用しない。妄想を疑う。
それだけ天使様は高嶺(たかね)の花という存在なのだ。
イケメンで優秀な男相手ならともかく、自分のようなぱっとしないだらしない男に手料理を

振る舞うなんて、普通天地がひっくり返ってもあり得ないだろう。
「……一つ聞いてもいいか？」
「何ですか？」
「俺にこうしてご飯分け続ける利点ってなんだ」
普通、労力もお金もかけるのに、無償で料理を渡すなんて、しない。周が逆の立場でもしないだろう。好意を抱いているなんて万が一にもない確率を期待するつもりはないが、不思議で仕方なかった。
周の疑問に、真昼は少し考えるように視線を上に向けて、それから表情も変えずに「私の自己満足です」と返した。
「何て事はないのですよ。私は一人分作るより二人分作る方が楽ですし、単純に人に振る舞うのが好きみたいなので」
「料理好きって事か？」
「まあそれもありますね。あなたは厄介な勘違いしないでただ美味しいって言ってくれるので楽ですし、あなたの食生活は見てて不安なのでやはり自己満足です」
「……そういうもんか？」
「そういうものですね。ですので、気を病まなくても降って湧いた幸運とでも思っていてください」

「へいへい」
これ以上は真昼も問答するつもりはないらしく、折り目正しく腰を折った後「失礼しますね」と自分の家に戻っていった。
（……そういうもんなのかなあ）
無償で与えるには相応（ふさわ）しくないと思うんだけどな、とぼやいて、周もまた自宅に戻った。
「誰だった？」
「近所の知り合い。おすそわけだってさ。冷蔵庫入れてくるからゲーム先進めんなよ」
「あごめんボス戦終わらせた」
「おいこらふざけんな」

第７話　天使様の怪我とお礼

周と真昼が初めて会話をした公園は帰宅途中にある。

周の住むマンションは家族用というよりは少人数で住むようなマンションなので子供は少ないし、周辺のマンションも似たり寄ったり。

そこからそう遠くない場所に作られた公園はこじんまりとしていて、どこか寂れたような雰囲気をかもしていた。

子供達が遊んでいる訳でもなく、閑散としたその場所に――学校からの帰宅途中と思わしき真昼を見つけた。

「お前こんなところでなにしてんの」

「……何でもないです」

ベンチに姿勢よく座ったまま微動だにしない真昼は、周の姿を認めて瞳を眇めた。

今回は前と違い顔見知りであり話せる間柄なためにあっさりと声をかけたものの、彼女の声は硬い。警戒されている、といった風ではなく、何かを表に出さないように気を付けている、といったように受け取れる。

「いや何でもないなら途方に暮れたような顔で座ってるなよ。どうかしたか」
「……別に……」
困り果てたような顔をしていたのが気になったが、真昼からその理由を口にする事はない。
外で関わらない、という条約が結ばれているものの、今回は真昼が何か困っているのでつい声をかけてしまった。
真昼としては、あまり関わってほしくないのかもしれない。
まあ言いたくないならいいか、と地味に表情を強張らせた真昼を眺めると、ブレザーに白い糸、というよりは毛が幾つも付着している事に気付く。
「てか制服に毛が付いてるけど、犬か猫と遊んでたのか」
「遊んでません。ただ、木の上で立ち往生していた猫を下ろしてあげただけです」
「なんてベタな事を。……あーそういう事か」
「え？」
「そこで待ってろ。絶対動くなよ」
真昼が言った事で何故ベンチに留まり続けているのか後れ馳せながら理解した周は、はぁとため息をついて一旦その場所を離れる。
真昼は、言い付け通り確実にあそこから動かないだろう。
というより、動けない、というのが正しいだろう。

変なところで強がりなやつめ、と一人こぼしながら近場にあったドラッグストアで湿布とテープ、コンビニでコーヒー用のカップ氷を購入して真昼のところに戻ると、やはりそのまま彼女は佇んでいた。

「椎名、タイツ脱げ」

「は？」

端的に口にすれば、真昼が極寒の声を出す。

「いやそんな声されても……ほら、ブレザーかけるし後ろ向いてるからタイツ脱げ。とりあえず患部冷やして湿布貼るから」

流石にタイツを脱がせて喜ぶ趣味はないので弁明もかねて購入品の入ったレジ袋を揺らすと、真昼の顔が分かりやすく強張った。

「……何で分かったのですか」

「ローファー片足だけ脱ぎかけだし微妙に足首の太さ違う。あとそこから立とうとしないからな。猫助けて足くじくとか本当にベタな事を」

「うるさいです」

「はいはい。ほらタイツ脱いで足だせ」

ちょっと見れば分かる事なのだが気付かれたのは想定外なのか、渋い顔をしている。

ただ、素直にブレザーを受け取って膝にかけたので言う事は聞いてくれるだろう。

周はそのまま真昼に背を向けて、コンビニで買ったカップ氷をビニール袋に入れて水を注ぐ。こぼれないように口を縛りつつ、軽くリュックに入っていたタオルでくるんで即席の氷嚢を作ったところで、ゆっくりと振り返る。

真昼は、言われた通りにタイツを脱いで素足になっていた。

無駄な脂肪のない、引き締まりつつも柔らかさを感じさせる滑らかな脚のラインも、足首の不自然な膨らみも、露になっている。

「まあ腫れはひどくないけどあんま動いたら悪化しそうだな。とりあえず、寒いだろうが少し冷やしとけ。痛みが薄くなったら湿布貼るから安静な」

「……ありがとうございます」

「今度からは最初から素直に頼ってくれ。別に恩を売りたい訳じゃないから」

むしろこっちとしては散々貯まりつつある恩を小分けにしてでも返したいくらいなので、困り事の一つや二つ解決させてほしい。

脚をベンチの上に乗せて足首を冷やしている真昼は相変わらずの表情だったが、周の気遣いを拒む事はなく、大人しいものである。

「痛み、引いたか？」

「……まあ、ある程度は」

「じゃあ湿布するから、……変態とか痴漢とか怒るなよ？」

「恩人にそんな失礼な事言いません」
「そりゃよかった」
やましい思いは一切ない事を強調して、真昼の足元にしゃがんで膨らみ赤らんだ足首に湿布を貼る。
一応痛みの程度を聞いたところ立てるし歩けるけれど悪化しそうだから大人しくしていた、との事なので、ひとまず軽傷の範疇であろう。
湿布を貼って一緒に買ったテープで固定すると、じっと周を見下ろす真昼に気付く。
「案外器用なのですね」
「まあ、怪我の処置くらいは出来るよ。料理は出来んが」
少しおどけたように肩を竦めると、くすりと小さな笑みがこぼれる。
先程から硬い表情をさせていたので、少しでもリラックス出来たならよかっただろう。
ほんのり態度が和らいだ真昼に内心安堵しつつ、リュックからジャージの下を取り出す。
「ん」
「はい？」
「いやだからそんな顔するな。足見えるだろ。湿布貼ったままタイツはく訳にはいかないだろうし。着用してないから安心しろ」
テーピングで一回り大きくなっている足首回りのままタイツをはかせるのも悪いし、違和感

があるだろうから防寒と下着が見える事を防止するためにはいてもらうのがいいだろう。
特に他意はないと分かっているらしく、実に素直にジャージをはいてくれた。
はいた事を確認してから、貸していたブレザーを摘まみ、代わりにいままでシャツの上に着ていたパーカーを入れ換えるように真昼に渡す。
「ほいこっち着る」
「いやだからなんで」
「背負われてる姿見られたいのか」
流石に、怪我人を歩かせるつもりはないし最初からこうするつもりだったのだ。
どうせ帰る場所はほぼ一緒なのだから、周が連れて帰った方が効率がいいし怪我にもいい。
「あ、悪いけど俺のリュックだけ背負っといてくれるか。流石にリュック背負ったままお前背負えない」
「背負わないという選択肢は？」
「あのなあ、足捻ってるんだから安静にしてくれ。誰も居ないならともかく、ここに丁度いい足があるんだから利用でもしといてくれ」
「足ですか」
「なんだ、腕がいいのか。横抱きをご所望か」
「私を抱えて家まで帰れる筋力あるんですか」

「馬鹿にしてるのか。……まあ自信はないな」
真昼自体を横抱きにするのは出来るが、流石にマンションまで運ぶのは結構大変だろう。あと、人からの注目が大変そうなので出来ればやりたくない。
真昼も軽い冗談で言ったのは分かっているので小馬鹿にされた事は怒るつもりもなく、それだけ軽口叩けるなら充分だと笑った。
「ほら、着たならフードかぶってリュック背負ってくれ。あと、ついでに自分の鞄も俺が背負った後に持っといてくれよ、お前支えるから持てないし」
「……すみません」
「別にいいから。怪我人放って帰ったり歩かせたりするほど男は廃ってないから」
屈んで背を向ければ、おずおずと真昼が周の背中に体を預ける。
パーカーまで着させたので着込んでいる筈なのに、それでも触れた体は細くて頼りなかった。首に回された手がぎゅっと絞めない程度に自分を捕まえるのを確認してから、周はゆっくりと真昼を背負って立ち上がる。
やはりというか、軽い。
周に口うるさく言う割に本人は食べているのかと心配になる程度には華奢だったが、元々小柄なのでこんなものなのかもしれない。
ほんのりと甘い匂いがするし、不安げにぎゅっとしがみつかれているという状況は色々と

思うところはあったものの、表にはおくびも出さずに帰路に就く。
背負っているという事で多少人から視線は浴びるものの、真昼が顔を隠すように埋めているため然程注目は浴びないのが救いだった。
「じゃ、これで」
真昼の自宅の玄関前まで運んで下ろして、周はこれ以上の干渉はすまいとあっさりと離れる。
壁を支えにしつつもきっちり自立出来ているので、怪我の具合もそうひどくはないだろう。
幸いな事に明日から休日なので、数日安静にしていれば歩行に支障ない程度までは治る筈だ。
「今日は俺のご飯とかいいから安静にしてろ。なんなら栄養補助食品でもやろうか」
「結構です。作りおきありますので」
「そりゃよかった。じゃあな」
ご飯に心配ないのなら何よりだった。動かないで済むに越した事はない。
真昼が玄関の鍵を開けたのを見て、自分もそのまま自宅の鍵を取り出した。
「……あの」
「ん？」
声をかけられて顔を真昼に向けると、自分の鞄を抱き締めた彼女がおずおずとこちらを見上げている。
ほんのりと揺れる瞳に首をかしげると、少し困ったように視線をさ迷わせて、それでも意を

決したのか周を真っ直ぐにみつめた。
「……今日は、ありがとうございました。とても助かりました」
「いいよ別に、俺が勝手にした事だし。じゃ、お大事に」
あまり気に病まれても困るのでさらっと流して、真昼がぺこりと頭を下げたのを見てから自宅の鍵を開ける。
そういえばパーカーとジャージを貸したままだった事に気付いたが、また後日返却されるだろうと予想をつけて、周はそのまま玄関の向こうに身を滑らせた。

「なに、お前年中短パンな元気系だったっけ」
月曜の体育が憂鬱なのは、周が運動が得意という訳ではないのと、この肌寒い季節に膝丈のジャージを着る羽目になっているからである。
この季節になるともう長袖ジャージが主流になっているのだが、膝から下を晒している周は周囲からやや浮いていた。
「ちげえよ。忘れただけだ」
「ばかでー」
「うっせ」
土日は真昼と会っていないのでまだ返却されていないからこんな事になっているのだが、

樹に言う訳にもいかず忘れたと言うしかない。

からかわれるのは甘んじて受け入れるが、けたけたと笑いながら背中をばしばし叩いてくるのはやり返しておいた。

樹が地味に呻くのを見ながらそっとため息をついて、視線を移す。

ただいまグラウンドで走り高跳びをしているのだが、女子も体育でグラウンドを使っての授業らしくグラウンドには女子の姿もあった。おまけに二クラス合同なため、結構な人数がグラウンドに居る。

あちらはあちらで陸上競技をしているので、待ち時間でこちらの体育を眺めている、といった感じだ。

「門脇くんがんばってー！」

基本は男女別の場所で授業があるので、女子が居ると男子達がざわめいていたものの……女子達の視線の先には、周のクラスメイトでありイケメンと名高い男子、門脇優太が居た。

周はまず話す事なんてほとんどないのだが、人当たりがよく勉強も出来て尚且つ一年でありながら陸上部のエースという事で、女子から人気なのは知っている。

周としては、天は二物も三物も与えるんだな、という感想なのだが、他の男子的には面白くないらしく微妙に渋い顔をしている男子も多い。

「おーおー相変わらず大人気だなあ優太は」

「そうだな」
「興味なさそうだな」
「いや実際関係ない相手だぞ、クラスメイトでもろくに話した事ないし。どうでもいいわ」
別に向こうが害してくる訳でもないし、関わりがないので正直どうでもよい。
それが少数派なのだとは理解しつつも、やはり他の男子達と同じように妬(ねた)むというところまではどうしてもいかない。
というか向こうの出来が良すぎて嫉妬(しっと)すらナンセンスだと思っている。
「妬まないのは周らしいよなあ」
「なんだ、モテモテで羨(うらや)ましいでござるって言っとけばいいのか」
「キャラじゃねえ」
げらげら笑っている樹を半眼で見つつ、女子からの声援を浴びて爽(さわ)やかな笑顔を浮かべている優太を眺める。
男から見ても均整とれた体つきに甘いフェイスは、まさに王子様といったところだろう。実際あだ名に王子というものもある男であり、パッと見欠点らしい欠点が見当たらない男だ。
女子からの熱い眼差(まなざ)しや甲高い声にはにこやかに微笑(ほほえ)みをたたえて手を振り返していて、本当に如才ない男だと関心すらする。
「なんというか、ほんと人気だな」

「だな。男子達が嫉妬待ったなしだ」
「はは。しっかし、女子達も元気だなー」
樹にとっては千歳という溺愛する彼女が居るため、他の女子には興味がないので他人事のようになってしまう。
千歳も優太にはこれっぽっちも興味がないので、樹が彼にどうこう思う事はないだろう。
(王子様やら天使やら、うちの学校は恥ずかしいあだ名付けられてるやつ多いよな)
そういえば天使様こと真昼は結局安静にしていただろうか。
休日出掛けた様子はなかったので大人しくしていたと思うが、怪我の具合はいかがなものか。
丁度真昼のクラスとの合同だったのでこっそりと辺りに視線を巡らせて見れば、人が沢山居ても際立って目立つ容姿の少女がグラウンドの端に居た。
体操服に着替えず、授業の輪にも入っていないという事は見学だろう。
ちょこんと静かに佇む真昼に視線が吸い寄せられている男子も多く居た。
遠目ながらぱちりと目が合って、気まずげに視線をさ迷わせれば彼女の口許にはくすっと小さな笑みが浮かんだ。
その向きが周、というか男子達の集団に向いていたため、笑顔を向けられたクラスメイト達が「今俺に微笑んだ!?」「いや俺だろ」とざわついている。
「これはチャンスだ、いいところを見せて椎名さんにアピールせねば」

「王子にいいところばっか取られててたまるか」
ささやかな笑顔一つでこうも沸きたたせるのはすごいと言えばいいのか彼らが単純と言えばいいのか。
「……単純だなあ」
同様の事を思ったらしい樹がこぼすので、周もつい笑った。
「まあ内申点もあるしそれなりに俺らも頑張らないとだめなんだよな」
「なんだ、周も天使様に見られてはりきってるのか？」
「いや違うけど。興味ないって言ったろ」
「ま、そりゃそうか。お前ほんとに興味ないからな」
彼女はいいぞ？　と彼女持ちの自慢が始まりそうだったので「ハイハイ」と流した周は、もう一度真昼の方を見て苦笑した。

「先日はありがとうございました。お借りしていたパーカーとジャージです」
その日いつものようにおすそわけに来てくれた真昼は、タッパーの他に紙袋を持っていた。
ちらりと見えるのは周が金曜日に貸したままのパーカーとジャージだろう。きっちりと折り畳まれて入れられている。
「ん。具合はどうだ？」

「もう痛みはほとんどありませんよ。完治するまで運動はしないようにします」
「それならいい。体育も見学してたみたいだし」
「ええ」
念のために体育は見学にしたらしい真昼だが、それで正解だろう。痛そうにはもう見えないが、ほんのりと庇うような歩き方をしているのでまだ完治している訳ではなさそうだ。
賢明な判断だ、と頷きつつ、体育の際を思い返してふっと笑う。
「しかしまあ、天使様すごい人気だな。微笑み一つで男子達のやる気みなぎってたからな」
「だからその呼び方はやめてくださいと……。私も困惑するのですけど、そんなに嬉しいものですか」
「まあ美人から笑顔を向けられたらやる気が出るんじゃねえのか。女子も今日ほら、門脇に手を振られてきゃーきゃーしてたし」
「……門脇……ああ、あのすごくモテてる人ですか」
真昼はあまり興味がなさそう、というよりは実際ないのか名前だけではしっくりこず周の説明でようやく見当がついたといった感じである。
天使様ほどではないものの、優太もそれなりに学年では有名な男なので、名前だけで思い当たらないというのは意外だった。
「お前は興味ないのか？」

「特に。クラス違いますし、特に関わる事はないですから」
「ふーん。他の女子は結構騒いでるけどなあ。カッコいいって」
「まあ綺麗な顔をしていますね。私は話さないですし関係ないですから。どうでもいいです」
「そういうところ淡白だよなお前」
「美醜だけで好意を抱くならあなたが私に抱いてないとおかしいでしょう？」
「お、自分可愛いって自覚してるな」
真昼の言う事はごもっともである。
綺麗という要因が好意を抱く理由にはなり得るが、綺麗なだけで好意を抱くというものでもない。それは同意するし、真昼が美少女なのも認める。本人もそれを自覚していて肯定している、というのが意外ではあるが。
「あれだけ騒がれていたら嫌でも分かります。それに、客観的に見て自分は整っているのは分かりますし、努力を怠った事はありません」
それが当然だ、という真昼は自慢げな様子など一切見られない。
実際、真昼は恐らく美貌を保つのにも手間を惜しまないだろう。
元々端正な顔立ちなのだが、それにあぐらをかいていない。
髪はあだ名の天使に相応しい天使の輪が見られるし、肌艶も完璧でにきびやくすみ一つない。
家事をしていても手は荒れていないし、爪も綺麗に磨かれている。出るところは出て引っ込

むところは引っ込んだ均整取れた体つきは、一朝一夕の努力でなった訳ではないだろう。
「左様で。淡々と事実を言ってるから鼻につく事はないけど、こう、褒められて照れるって事もなさそうだな」
「あんまりにしつこく言われると辟易する方が先に来ますよ」
「大変だな美人は」
「その分得もしてますから一概に悪いとは言えませんけどね」
「ほんと他人事のような……」
「なんですか、照れて『そんな事ないですよ』と言えばいいのですか」
「いやお前の素を知っている身としてはそれをされても違和感が」
「そうでしょうね。私としても、あなたにそういう振る舞いをしても無意味だと思いますので」
「そうだな」
真昼が取り繕わないのは今更なので変えられても困るし、学校の真昼のように接してこられると微妙に鳥肌が立ちそうなので、是非このままでいてほしかった。
慣れとは怖いもので、学園の天使様が天使様らしく振る舞っていると違和感を覚えてしまう。
周にとっての真昼は今の真昼であり、学校での真昼ではないのだ。
結論としてはそのまま、という事が二人の間で決まったところで、周は渡されたタッパーを見る。

いつもより大きめのそれにはいくつかのおかずが詰められており、品目も多目。おすそわけというか最早弁当を渡されているようだった。
「今日は豪華だな」
「お世話になったので」
「気にしなくてもいいっつーか……おお、コロッケもある」
たかがコロッケと侮るなかれ。
コロッケは惣菜でよく売られているが、自分で作るとなると面倒くさい家庭料理筆頭である。
じゃがいもを蒸かして潰(つぶ)して炒めた牛肉やら玉ねぎやらと合わせて整形したのち、しっかり冷やして衣つけて揚げて……と地味な手間がかかっている。
料理をほぼしない周でも母親が作るのを見て面倒くさいし絶対作らないと思ったほどだ。
「まあ作り置きで冷凍していたものを揚げただけですけど」
「だからついでに唐揚げがあるのか」
「そうですね」
一人暮らしだと揚げ物なんて惣菜でしか手を出さないので、手作りはありがたい。
欲を言うならば、揚げたての衣サクサクの状態でご飯と共に食べたいが。
「……たまには出来たて食べてみたいよなあ」
彼女は衛生上なのかある程度冷ましてからタッパーに詰めているので、どうしても一度温め

直す必要がある。揚げ物もトースターで衣のカラッと感は復活出来るものの、揚げたてには及ばない。

無論それでも非常に美味しいのだが、やはり出来たてというのは格別だろう。

特に他意はなく単なる願望が口から漏れてしまったのだが、随分とはっきりした独り言になってしまったため、真昼が僅かに眉を寄せた。

「家に入れろと？」

「んな事言ってねえよ、流石に分けてもらってる身でおこがましすぎるわ」

あらぬ疑いをかけられたので肩を竦めてしっかり否定するのだが、真昼は口許に手を当てて視線を下に向けている。

何か考えているらしく周と目が合う事はない。

「……折半」

「ん？」

「食費折半で、あなたの家で作るなら考えます」

ようやく口を開いた真昼が放った言葉は、周の口を開けっぱなしにする程度の威力はあった。

冗談というか思わずこぼれた思い付きだったのだが、真面目に検討された上で承諾されるとは思わず戸惑うばかり。

普通、さほど仲良くない男の家に上がって作ろうと思うだろうか。

そちらの方が効率はいいとはいえ、相手は異性であり気心の知れた仲という訳でもない。不安になったりするものではないのか。

「折半はむしろ望むところというかもらいすぎてたから全然いいんだが……お前身の危険感じないの？」

「何かするなら潰します。物理的に。再起不能に」

「やだこわ。ヒュンってしたわ」

「そもそも、そんな事しなくても、あなたはリスク考えてなにもしないと思うので。私の学校での立ち位置をよく分かってらっしゃるでしょう？」

「仮になんかしたら俺が破滅だわな」

周と真昼では圧倒的に人望の差がある上にか弱い女性という事で、彼女が周に乱暴されそうになったとこぼせば確実に周は学校に行けなくなる。

社会的な死を迎えるのを分かっていて何かするほど、周も馬鹿でも節操なしでもない。

というよりしたいという気にならないのが本音だ。

「それに」

「それに？」

「あなた、私みたいなのタイプじゃないと思うので」

真顔で言い切られて、つい苦笑してしまう。

「もしタイプだったとしたら？」
「そもそもしつこく話しかけてくるでしょうに、そうしたら私は関わらなかったんですけどね」
「お眼鏡にかなったのかね」
「まあ、安全な人だとは認識してます」
「それはどうも」
それでいいのか、とは思いつつも、真昼になにかするつもりは更々ないので否定はしない。
それに、極上の晩ご飯が出来たてで食べられるという折角の機会を逃すつもりもなく、周は無害な男という称号を受け入れてお相伴にあずかる権利を得たのだった。

『お隣の天使様にいつの間にか駄目人間にされていた件』の
試読版はここまでです。
お読みいただきましてありがとうございました。
続きは6月15日頃発売の製品版でお楽しみください！
※この試読版は製作中のものであり、製品版と一部異なる場合があります。